

世界ボリシェヴィキ

1. プロレタリア独裁と背教者 田原芳
2. 「左派」を名のる小ブル「右派」
3. 「叛旗」はいかに革命を裏切っているか
4. 「キム」の名に恥じる国際改良分裂主義
5. 「同盟外・内戦宣言」
6. 「赤軍」から「赤軍党」へ

赤軍党

宣伝煽動局

「プロレタリア独裁と背教者田原芳」

プロレタリア独裁の

言葉上の承認と実質上の否認

「プロレタリア独裁の承認」これこそレーニン主義の最高峰であり、共産主義者の常識である。しかし、この常識・あたりまえのことが一般化されればされるほど、これを出しに人民をベテンにかけようとする人間が登場してくることに注意しなければならない。疑いこそ科学の出発点である。偉大なレーニンは、一般化された「マルクス主義の承認」に満足せず、「プロレタリア独裁の承認」をもって当時の「マルクス主義」を検証した。今や我々は、「マルクス・レーニン主義」の検証を、言葉上の「プロレタリア独裁の承認」に固定化せず、「プロレタリア独裁の承認」の必然の帰結としての「社会主義軍隊との結合」「世界革命戦争勝利」「世界赤軍」「共産主義世界革命」のスターガンによって実施しなければならない。現代日和見主義の「プロレタリア独裁」の実質上の否認は、まず第一に「反スターリン主義」理論に明らかになよう反社会主義的立場であり、第二に社会主義に対する経

済主義的な対応からの反社会主義的改良主義であり、第三に社会主義を資本主義の発展として見ずに後退として見ることである。

第一の立場の「反スターリン主義」は、現代世界革命の時代における帝国主義に組する反社会主義的小ブルジョアオロギーである。それは、帝国主義の腐朽を明らかに反映した小ブルの危機意識である。それは、現実の世界革命戦争の阻害物であり、今や小ブル反戦主義の主役となっている。我々共産主義者は、戦争を恐れたこともないし、革命主義精神を捨てたこともない。我々共産主義者は、その戦争の性格上、時として個人独裁を認めなければならない。党による徹底した粛清をも行わなければならないのである。このような行為は、もし本当に革命に献身しようとする人なら自ら実行しなければならないし、現実に銃口を向けられている共産主義者ならただちに理解されるであろうものである。第二の立場の反社会主義的改良主義は、「現代ソ連論」「ソヴィエト経済論」等々の経済主義的分析によるものであり、第三の立場は、社会主義社会を資本主義の発展と見ずに、社会主義の組織化を独立の理念に押し下げようとする見解である。我々はこれらの傾向を総じて新左翼主義と呼んでいる。新左翼主義は、白色日本共産党・革共同・構造改革諸派・黄色日本共産党によって担われている。新左翼主義は、言葉の上では「プロレタリア独裁を承認する」と言いながら、現実の戦略・戦術上においては積極的に「プロレタリア独裁」||「社会主義軍隊」を否認し、国際分裂主義・国際

改良主義へと墮落しているのである。それ故新左翼主義の党組織は、言葉上の勇猛さに比較して実に憐れむべき姿を露呈している。我々は、「プロレタリア独裁」を「社会主義軍隊」の存在において瞬間から、まずもって軍の建設にとりかかった。それも個別の軍団としてではなく、世界革命戦争に耐えうるどころの赤軍の建設にとりかかったのである。

そして、我々が軍の建設を押し進めた瞬間から、自らプロレタリア独裁者を自認する御人、田原芳綱領委員会一派は、共産主義世界革命への裏切りを断行したのである。思い返せば六〇年代前半にも小ブル哲学者や近代政治家がプロレタリア独裁を弄んだこともあった。しかし、このことは笑い話としてすませることはできても、党文献として綱領委員会の名をもって登場している以上、我々はこれを見逃がすわけにはいかない。

我々のここでの任務は、田原芳の論文『現代革命の条件と社会主義』を批判しつつその背教者ぶりを暴露することにある。

裏切者田原芳は、ロシア革命の基本的な問題点なるものを持ち出して、自らのピントボケのみを証明している。「ロシア革命が示した最も基本的な問題は、プロレタリアートの独裁において『民主主義的中央集権国家』が不可欠であることを示した、その『民主主義的中央集権国家』プロ独における『前衛党』の『一党

独裁』の不可避性を示した点である。これを拒否することは、エスエル、メンシエウイキ、『左翼反対派』のように、無政府主義、組合主義、アナルコ・サンディカリズムに転落することを意味する。「いかに裏切者田原芳にふさわしいマジックである。確かに『プロ独』とは実質上の一党独裁である。このことは正しい。しかし、ロシア革命の基本的問題として現的に提起されているのは、明らかに党が武装蜂起を実践するの否かであり、革命か反革命かはこの基準によって規定されているのである。このように、裏切者田原芳は、革命と反革命を『前衛党』の『一党独裁』の不可避性の承認に求める改良主義である。すなわち蜂起の党々蜂起の軍隊をもってする我々の党派闘争に無自覚であることの証拠である。そしてプロ独の権威者田原裏切者は、次にこのように語る。「それは、同時に、一党独裁が無規定的に党の組織、規律一般、指導性一般に昇華するとすれば、明らかに、歯止めのない独裁に、党大会が中央委員会へ、政治局が書記局へそして個人独裁へと昇天することでもあった。」これこそ、裏切者

の小ブルインテリゲンツィアとしての立場を明らかにした言辭以外の何ものであろうか。続いて田原は、嘘に満ち満ちた観念の領域に達する。「ロシア革命とレーニンが陥った困難は『パリ・コミューン四原則』では解決することは出来ない。『国家と革命』における階級、国家、そして党の死滅の自然的過程が目的意識

的な活動・指導によって導かれねばならなかった。ロシア革命によって切り開かれた階級闘争に対する共産主義的指導の質の核心的な点がここにある。この問題の解決こそ、今日の共産主義者に問われている基本問題である。「我々は一貫してロシア革命以降の時代を世界革命の時代と規定し、それはプロレタリアートの共産主義世界革命へ向けた世界革命戦略・戦術によってのみ導かれなければならないと言ってきた。それを『パリ・コミューン四原則』や『階級・国家・党の死滅』などと言った改良主義的言葉に摩り替えているのが裏切者田原芳の正体である。

「この一〇年余の活動において、我々は、この問題（コミューン四原則や階級・国家・党の死滅）を解決することができなかった。そしてこの弱さを『パリ・コミューン四原則』の復権運動にたよった。」なんと空しいことか。共産主義者同盟は、一〇年余もこんなつまらないことをして来たのか。いや違ひ。世界革命の戦略戦術をそれなりに練り上げて来たのである。このようなことは、共産主義者同盟総体が今や右と左に大きく分解し、田原芳が右翼裏切り者として登場していることの証明である。

「四・二八闘争を境として、大衆闘争が反政府運動から政府打倒闘争へ転化するや否や、この矛盾はもはや被い隠すことの出来ない問題へと発展した。」「ロシア革命とレーニンのぶつかった壁の克服『パリ・コミューン四原則』の止揚、この困難、気の遠

くなる仕事を、何が何んでも解決しなければならなかった。」

「九回大会以後の組織整備と、秋の闘争、なかんずく、軍隊の組織化が一定の軌道に乗るとともに、再び政治局は、綱領討議の組織化にとりかかった。」一体この三つの文章に何の連関性があるのだろうか。まず、政府打倒闘争が開始された。そして、コミューン四原則の止揚が必要であると、そして、軍隊の組織化である。これがこのインテリゲンツィア裏切り者のいつもの癖である。ここで真の問題点は、政府打倒闘争に向けて軍隊を組織化することだけが党に提出されているということであり、それを今さら「コミューン四原則の止揚」等々の純理論的問題を媒介にして党の任務を疊してしまおうのである。このようなやり方によって裏切者田原芳は、人民を騙している。更に臆面もなく「昨年一年間の党内闘争↓分派闘争↓党派闘争は、問題を『無政府主義と官僚主義』として提出した」とおっしゃるのである。

プロレタリア独裁の権威者田原芳は、次のように問題提起する。「『プロ独』の内実をめぐって、従来の定式を打ち破らねばならないこと、『プロ独』の発展・止揚の問題が、今日我々の綱領をめぐる問題として検討され提出されなければならないということである。」と。一体従来の定式を破るとはどういうことか。仔細に検討してみよう。彼によるとこういうことになるらしい。「一七年のロシア革命以後、まさにレーニンも言う如く、それまでの

綱領が主たる感心事として来た『権力奪取』をめぐる問題と共に、いかに『社会主義を組織するのか?』という領域をまさしく綱領を綱領たらしめる領域として要請している」そして、さらには「今日のスターリニズムに対する我々の党派闘争をはじめとする世界の党派闘争の、根源的な闘争が、まさしくこのいかに『社会主義を組織する』のかという内容をめぐって闘われているということに他ならない。」と語っている。すなわち、彼、裏切り者田原芳は、たしかに「権力奪取」も考えなければならぬし、また「社会主義の組織化」も考えなければならぬという二元論的の間派(折衷主義)から、明らかに「綱領問題」の中心点を「権力奪取」におかずに「社会主義の組織化」におこうとして従来の二元論者以下に後退している。このような裏切り者にスターリンが批判される必要はないし、この裏切り者は、レーニンやスターリンに完全に批判された第二インター主義のカウツキー主義の全衣裳を身につけている。明らかに、田原芳の語る「世界革命」や「世界プロ独」や「世界党・世界赤軍」は、単なるインテリの言辭上の遊びである。

我々の見解によれば、「綱領問題」とは、(A)権力奪取(V)をめぐる戦略・戦術の問題である。にもかかわらず、裏切り者田原芳は、「全世界にわたって、我々がいかなる『社会主義を組織する』のかという、その質をめぐる党派闘争を媒介とした『権力奪取』

の問題として、その戦略・戦術の問題として各国の革命をとらえることを要求している。」と云ってプロレタリアートの世界共産党的任務をボヤカしている。我々の見解によれば、党の問題が、(A)権力奪取(V)を射程において立てられていることは次のような事情によるのである。第一に、現代世界の根本問題は、社会主義と帝国主義の分裂による全世界二重権力状態にあり、究極的にそれは世界ソビエト・プロレタリア独裁にまで行きつくものである。であるが故にここにおいてまず問題になるのは、共産主義世界革命に向けた(A)世界社会主義(B)世界プロレタリア独裁(V)を目指した(A)権力奪取(B)権力闘争(V)である。第二に衆知の如く帝国主義を打倒するための闘争は明らかに(A)権力奪取(V)であり、第三に民族解放闘争もカイライ政権を打ち倒す(A)権力奪取(V)でなければならぬ。すなわち、全ての問題は(A)権力奪取(V)をめぐって展開されなければならないのである。

裏切り者田原芳の正体は軍事問題においても明らかである。彼の見解によれば、(一)……、(二)国家の正規軍・常備軍の解体・止揚、それを何におきかえるか、(三)ブルジョア民族主義・連邦主義に対する世界党・世界赤軍、(四)ということになる。しかし問題はこうである。国家の正規軍・常備軍といっても、ブルジョア国家のことをいっているのか、プロレタリア国家のことをいっているのか明確でない。我々の見解によれば、ブルジョア国家の正規軍

・常備軍は解体しなければならないが、しかしプロレタリア社会主義軍隊を解体すべきであるのか? いや決して解体せよとは言わない。それどころかこのような社会主義革命によって勝ち取られた社会主義軍隊を強化及び増設せよと主張する。このことよってのみ、次の問題も規定化してくるのである。すなわち(五)のような「ブルジョア民族主義・連邦主義に対する世界党・世界赤軍」ではなく、ブルジョア国家の正規軍を消滅するための世界党・世界赤軍でなければならないのである。明らかに党の任務は第一に、敵を内部から解体することではなく、敵を絶滅するということがなければならない。このように田原芳の語る世界党・世界赤軍とは、世界革命戦争のもとに定立されたものではなく、純イデオロギーの問題又は「いかに社会主義を組織するのか」といった改良主義的把握によって歪められたものとなっている。

そしてまた武装と戦争の問題においても、彼は一般的な全人民の武装とか党に指導された軍隊の恒常的武装闘争といったような一般論において軍事一峰起を弄んでいる。全人民の武装、これは情勢を急速に煮つまらせる場合とか、明確な階級対立を浮きざかりにさせる場合には一般論としての正しさを發揮するだろう。また恒常的武装闘争とは、一切が主観的願望であって、現在のような転変する情勢のもとにあってはかえって危険であるし、合法と非合法闘争の結合を阻害することにもなりかねない。まさに現在の

ような権力闘争が戦争によって表現される時代においては、まず全人民の武装の前に党の武装が先行しなければならないし、恒常的武装闘争の前に武装蜂起が先行しなければならないのである。ロシア革命・中国革命・キューバ革命等をも、その正しさは明らかである。

この裏切り者田原芳は、その正体から当然のこととして、現代世界の日和見主義とも手を携えてマルクス・レーニン主義を混乱に陥し入れている。すなわち、「今日的な世界的党派闘争」という項において、彼は、「官僚主義、民族共産主義、一国社会主義、一国革命との闘争」を唱えている。我々は共産主義者であり、共産主義世界革命は、「官僚主義、民族共産主義、一国社会主義、一国革命」といった過程をへずして、獲得されることは考えたことはない。そして我々は原理をマルクス・レーニン主義にもとづく科学においているのであり、このような革命的な地方性が現代世界革命の時代において、その地方性をますます完全なものとするならば、ますます完全な世界性へ必然的に到達するということを見出さなければならないのである。我々は、「官僚主義、民族共産主義、一国社会主義、一国革命」に対して党派闘争を展開するのではなく、共産主義者の隊列内のブルジョア官僚主義者や民族主義者に対して徹底した党派闘争(内戦)を展開するのである。すなわち、この裏切り者田原芳のような人物と党派闘争を展開することが我々の緊急の任務と考える。

そして現実の党派闘争において裏切り者田原芳は、次のように問題を提出している。「スターリニズム、社民、構改、第四インター、M.L.、中核、赤軍派」の諸党派は、「『三ブロック階級闘争』過渡期世界における階級闘争の特殊形態を承認しない教条主義・修正主義」であるというのである。一体「三ブロック階級闘争」過渡期世界における階級闘争の特殊性とは何なのか？我々の見解によれば、教条主義・修正主義諸党派こそ、この現代階級闘争の特殊形態とやらを身につけていたのではなかったか。我々は次のように現代の党派闘争の基準を確定する。すなわち、**社会主義国家内の内戦**と**自国帝国主義打倒闘争**と**反帝民族解放闘争**を領導する世界党・世界赤軍の物質的基盤—世界革命戦争の承認と、**社会主義軍隊**と**先進国プロレタリア軍団**と**民族解放戦線**の革命的結合にもとづく世界的指令部を創設し世界党・世界赤軍のもとに国際根拠地・国際的革命諸機関を通じての帝国主義政府とそのカイライ政権を打倒するための武装蜂起の実行によつてのみ現代世界革命の時代における全党派闘争の意義はある。しかし裏切り者田原芳は、一方では世界革命戦争を特殊形態という瞞しでもつてその歴史の必然性を認めず、現代世界革命の時代におけるプロレタリアートの任務を引き下げようとしている。すなわち、まさに特殊性に対する寛容の精神でもつて。そして他方では、彼は、「自国帝国主義打倒」のための闘

ある。それ故**社会主義軍隊**とは教条でもなく、原理でもないのである。このように裏切り者田原芳は、党を理論機関に後退させ、党の軍を独立に建設し、その軍が恒常的武装闘争を行なうということを示した。これが日和見主義でなく、パルチザン主義でなく、サンディカリズムでなく何であらうか？これに対する我々の見解は、**社会主義軍隊**を堅持し、革命戦争を組織し、武装蜂起を完遂することである。要するに田原芳は、自ら吐いている「**党の革命**」ということにすら自覚的でないのである。いやそれどころか、彼の「**党の革命**」とは、反革命の党への後退なのである。次の言葉は、彼の犯罪性を最も明らかにしているところのものであり、その犯罪性を精神主義でもつて隠蔽している。「戦略・戦術それ故に権力奪取の党から社会主義を組織する党への止揚・党の団結の質を高めること、同盟員の綱領討議によつて、この過程を通して、党の団結の質を自らつくりあげること、もつて同盟の気風を討議、説得自発性、創造性をはじめ英雄精神、忍耐、献身性等を確固とした理論武装と階級意識を媒介として実現すること。」「**権力奪取**」の党の創出がまず完成されない限り、「社会主義を組織する」ことなど不可能だということはこの権威者田原芳にはよく解っているのであるが、この間の激烈な党派闘争の渦中においてその小ブルの本質を徹底的に暴露せざるを得なくなり、このような醜態をさらけ出したのである。しかし、この狂気沙汰に対

争は、平板な党の軍隊による恒常的武装闘争によつてなされなければならぬといっている。しかし、これは彼が小ブル的発想、解党主義的発想によつて導かれて「**党の革命**」とかいうものとも全く矛盾するのではないか？我々は、明らかに新たな党を建設するといつても、旧組織の再組織という問題をぬきにして考えたことはない。だとするならば、彼がその次にいうような「**教条主義**、極左に対する闘争」を「**党を軍と等置し、党を戦闘団、軍団、軍隊に解体しようとする部分との闘争**」に等置していることの問題点を明確にしなければならぬ。我々は、**社会主義**と**自国帝国主義**という思想を堅持しなければならぬといってきた。しかし、このことは、次のような事情によつてきている。第一に我々が獲得した階級闘争の地平は、すでに革命戦争の実現なしには一歩たりとも前進することはないし、従来のような理論機関としての党は、その革命的理論の必然として党の政治機関—**党の戦闘団**を改革していかなければならない。そして第二には、このような党の軍隊を全面的に革命戦争に耐えうるものとするための再組織に際しての全意義を認めることのできない小ブル分子に対して、我々は、**社会主義**は**軍である**といふ思想の堅持を認識しえたのである。すなわち、**社会主義**といふ現在の我々の立場は、田原芳のように党を理論機関に後退させ、そして独立に党の軍隊を建設しなければならぬとする日和見主義者に対してその全意義があるので

して、我々共産主義者は、現代の党派闘争なんぞは子供の遊びとなるような戦争に耐えねばならぬし、その戦争に勝利しなければならぬのである。このような前哨戦において脱落した分子が最後までやりとげることはありえないことであり、生ける屍は、我々の手によつて死に致らしめねばならないのである。「わが同盟において進みつつある革命は、なみのものでないがゆえに、古い同盟員の多くは耐えられず、我が同盟から去って行きつつある。……去る者は去るがよいのだ、我々は追わないだろう。」と。たとえ田原芳が何んと言おうとも、我々に敵対してくる以上、我々は、敵対するものは放っておくとは絶対に言わない。敵対するものは何物たりとも壊滅させよう。裏切り者田原芳一派を粉砕せずしてプロレタリアートの革命闘争は一歩たりとも前進しない。「階級闘争の質の転換にもとづく**党の革命**」、これこそ、裏切り者田原芳の欺瞞に満ちた言葉の一つである。「われわれが確認しなければならぬのは、階級闘争が、ブルジョア権力を打倒し、プロレタリア権力を樹立すること、すなわち、その最も凝縮された問題としての権力奪取が階級闘争の最大のそして基本的な問題であった時代から、萌芽的にはパリ・コミューン、画期的にはロシア革命を転期として、階級闘争が、共産主義に向けて社会主義を組織することを、階級闘争の質として要求しはじめる時代に入っているということである。」これは問題の完全な摩り替えであ

る。ロシア革命を転機とした現代世界革命の時代は、ますます全世界の被抑圧人民の前に、 \wedge 権力奪取 \vee を提起しているのであり、この全世界的権力奪取の単一性と同時性においてのみ世界革命戦争の物質根拠があり、共産主義世界革命に向けた一切の準備と組織化が問題になるのである。それ故、田原芳は、当然その正体を経済主義と改良主義のとんでもない姿をあらわさざるをえない。「今日我々が突き当たっている困難、最大の問題は、どのような社会主義を建設するのかということ、そのために党にどのような指導が要求されているかということである。」と。「どのような社会主義を建設するのか」という問題が、現在の党の最大の任務であると言わなければならない。彼は、そんなことは百も承知でなかったのか。彼は、プロレタリア独裁の権威者として自他共に認められる御人ではなかったのか。「どのように社会主義を建設するのか」という問題は、すでに解決されている。マルクス・レーニン主義の諸文献、たとえば「資本論」や「帝国主義論」や「さしせまる破局」等々によって解決済みの問題ではないのか。すなわち \wedge 権力奪取 \vee の問題が、従来のように平和的にゆるやかに提出されずに、現在のように暴力的に急速に憤出してような時点において、彼、裏切り者田原芳は、権力奪取のためのより高度な任務を放棄して、経済主義・改良主義的に「どのような社会主義を組織するのか」と言ってお茶を濁しているのである。

ある。これに反して田原芳は、全くの楽天主義から情況の読みを誤り、党が前進するためには、従来の「権力奪取」の党を「社会主義を組織する党」に改変しなければならないと言ふ。そしてこの楽天主義者田原芳は、ついに次のような自己暴露を行っている。「これは何という矛盾ではないか。それは確かに矛盾であり、矛盾以外の何ものでもない。だが、この矛盾こそ今日の『過渡期世界における階級闘争の質』に他ならない。党とは、まさしくこの矛盾であって、この矛盾の解決なのだ。」言葉の遊びは止めたまえ。貴方自身の論述自体が現実と矛盾していること、その論述が全くの日和見主義に行きつかざるをえないことが現実なのだ。そして最後に彼の正体を明らかにするが如く、次のようなマルクスの引用がある。これは、明らかに場違いの引用であり、彼の裏切り者としての証拠である。「共産主義は、われわれにとつて成就されるべきならんかの状態、現実がそれへ向けて形成されるべきならんかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を共産主義と名付けている。この運動の諸条件は、いま現にある前提から生ずる。」これに似た言葉を諸君は聞いたことがあるだろう。「運動がすべてである。」というマルクスの言葉を無制限に引用した例を我々は知っている。我々は、現在の革命的情況の前に、このような日和見主義の系列が膨大に登場している現実を、矛盾としてとらえなければならぬ、この矛盾を止

そして次にこの裏切り者は、現情勢についての楽観主義に陥り、ついに階級闘争を天国に変貌させている。「『プロ独 \parallel コミューン・ソビエト \parallel 全人民の武装』という一般的表現のみでは、もはや階級闘争が到達した実態にとって役に立たないものになってきた。何故なら、それは、まだ萌芽的ではあるが、すでに現実のものとなっており、党がそこから一步前進することなくしては、この形成されている階級闘争の質をもう一步高めることは、出来なくなつたということであり、このレベルの階級闘争の質において、大衆はそこまで前進し、党はそこに止まっていたのである。」何んという楽観主義！「プロ独 \parallel コミューン・ソビエト \parallel 全人民の武装」が、「萌芽的に現実のものとなっている」そんな。「大衆はそこまで前進した」そんな。何んという不面目！「党はそこに止まった」とは。すなわち彼の表現によれば、「プロ独 \parallel コミューン・ソビエト \parallel 全人民の武装」が「萌芽的に現実のものとなり」「大衆はそこまで前進した」が「党はそれ以上に前進しなかった」ことになる。このような論述が、ブルジョア評論家好みの言葉「大衆による党の乗り越え」とどう違うのか？我々の見解によれば、「プロ独 \parallel コミューン・ソビエト \parallel 全人民の武装」は一般的には現実のものとなりえず、「大衆」はそこまで前進しえず、 \wedge 党 \vee はこのような情況の下にあって現実的に \wedge 権力奪取 \vee という要件を満すべきあらゆる準備をなさなければならないので

揚しなければならないのである。革マルしかり、裏切り者田原芳しかり、新左翼しかりである。我々は、田原芳が世界革命戦争を言葉の上では承認しながら、実際的には世界革命戦争を否定しているとしつこく言ってきた。それは事実であり、次の言葉によって明らかである。「同盟第七回大会以降、深められて来た、まったく革命的な点は、この帝国主義軍隊の解体を更に、ただそれだけにとどめるのではなく、『労働者国家』をとわず『国家の正規軍』を解体しなければならぬ」ということであつた。そして、まさしくこの『国家の正規軍』『常備軍』の解体を基盤として『民族国家を廃絶する』ということであつた。「我々が言う世界革命戦争とは、この裏切り者が言うような国際改良主義、そして必然的にそれは反社会主義に陥らざるを得ない、ではなく、ロシア革命によってその端が開かれた諸革命の集積と共産主義世界革命に致るあらゆる条件を基礎にしていなければならない。にもかかわらず、彼ら『労働者国家』、我々の理解では社会主義国家、を問わず『国家の正規軍』を解体しなければならぬ」というのである。彼に言わせれば、ブルジョア国家もプロレタリア国家も国家には何んの違いもないのだから、そのような国家の軍隊を廢して党の軍隊を建設しなければならないということになる。しかし、彼の本当の意図はそんなところにあるのではなく、次の「赤軍派」に対する彼の

見解を見ればすぐわかるであろう。「赤軍派」の喜劇は、まさしく、『赤軍』が、全人民の武装との関係、そして、今日的な党の任務及びその団結の質との関係を不問に伏して、『赤軍』を独りあるきさせた点にあった。……『赤軍』が党を離れ、また、全人民の武装とはなれ独り歩きをすることが何を意味するかわれわれは、この間の党内闘争・分派闘争・党派闘争の何よりも重要な、血であがなわれた教訓として総括し、決して忘れてはならないのである。「これが彼の意図するところのものであり、その自己の利害から、とんでもない結果に行き着かざるをえなかったのである。すなわち、「赤軍派」が登場したことを「軍」が「党」を離れたという点において総括し、「赤軍派」の提出した理論的・組織的党派闘争を理解できず、単に「党」からの逃亡としてしかとらえていないのである。これこそ、日和見主義的党をいつまでも守り切ろうとする「死せる屍」でなくて何であろうか。そして、この地点において彼自身にだけ定立された「プロントの正規軍」が無制限に「革命党の正規軍」として発展し、そのことが要するに世界革命戦略を無視して「労働者国を問わず、国家の正規軍を解体しなければならぬ」ということになってしまっているのである。そして、これが世界党であり世界赤軍であると。このような人物が存在する限り、我々は社会主義国家による血の粛清が必要だと言うのである。もし、まじめに革命について考え、またその戦略

党及び大衆の成熟の程度によって厳然として規定されていることは、ただの一度でも、軍事及び軍隊を組織したものであれば知っていることである。これは原則、鉄の原則である。「これは、鉄の原則ではなく、誤った歪められた原則である。党軍は大衆の成熟の程度によって規定されていず、直接的には、敵をつくることによって党軍は組織される。そして軍のない党（軍）党を理解できないものは、大衆が成熟すれば、右往左往混乱状態になってしまふであろう。このことは、一度でも日和見主義軍隊を組織しようとした人にはよく理解できるであろうが、軍事の不徹底と言葉上での軍事化は、このように軍事が客観的に突出してくる時代においては犯罪的な役割しか果たさないであろう。裏切者田原芳こそ、その不徹底の標本である。

プロレタリア独裁の権威者田原芳は、次のように語る。「共産主義革命に責任をもとうとすればするほど、世界党と世界赤軍をプロレタリア独裁の不可欠の、決定的な構成要素とせざるを得ない。」と。それでは、彼に責任をとってもらおうではないか。しかし、このような学者先生にこんな重荷を引き受けさせるのはあまりにも酷というものだ。「『世界赤軍』は国家であるかないか、より進んで、党は国家であるかないかという問題である。「こんなことが何故「決定的な領域」なのか？我々は、田原芳を一インテリとして取扱っているのではなく、共産主義者同盟綱領委員会と

を確定する立場にある人間なら解りそうなものなのに、田原芳は、このような底なしの改良主義に陥らざるをえなかった。世界革命戦争は、学者の思いつきでもないし、哲学の応用でもない。世界革命戦争とは、共産主義世界革命勝利のための「敵」と「味方」の確定と、実際上の戦争でなければならぬ。今さら「党が直轄の軍隊をもたねばならない」ということも現情勢を全く無視した言葉といわざるをえない。軍のない革命党なんぞ存在しているであろうか。党の直轄軍のない社会主義国家など存在するであろうか。一切合切、裏切り者は裏切り者でしかない。裏切り者田原芳は、世界革命戦争の上で我々の敵である。連邦制や人民共和制という言葉に対する言葉上の小ブル的反撥は止めようではないか。そうではなく、現在の社会主義国家がその形態の成熟とその限界に突き当らざるをえないところから、我々の世界党・世界赤軍は出発しているのである。それ故、世界党と世界赤軍は直接的に「社会主義軍隊」と「先進国プロレタリア軍団」と「後進国民族解放戦線」の革命的結合によらなければならない。このような革命軍の本質的な、第一義的な問題を捨象して「『人民の創造力』をはなれた革命を我々は考えることはできない」とか「大衆の成長、成熟の程度とこれに対する適確な指導と、大衆を自ら経験させる活動、これを離れた軍はありえない」と言って現代革命を弄んでいる。「党が『軍隊』を組織する場合、それは

して接しているのである。田原芳のプロレタリア独裁に関する論述はすべてがこのような観念によって導かれていたのであり、帝國主義打倒や世界革命戦争などという言葉はほんの御添え物としてしか存在していない。要するに田原芳は、プロレタリア独裁の問題点をカウツキー主義的にそらすことによって現代経済主義に陥っている。「資本主義における『賃金奴隷制度』にかわって何を實現しようとしているのか。そのためにはどのような組織が必要であり、どのような組織をつくり出すのか。そしてそこにどのような規律を与えるのか」ということこそ、プロレタリア問題である。「笑えてくるではないか。第一に「党が國家であるかないか」という問題が「決定的な領域」であるとか、またしても「賃金奴隷制度に替わる組織」が「プロレタリアの基本問題」であると彼は言うのである。このような問題設定が、革共同一派の経済主義やサンディカリストの労働者自己権力運動とどうちがうのか？裏切り者田原芳は、この問題に答えることなく、居直りとナルシズムでもってこう答える。「プロレタリアは國家であり、党及び赤軍は、実質上國家のクラブと國家の軍隊なのである。」と。これは、まさに彼の窮地の策としての発言であり、さらに次の言葉によってそれは証明される。「プロレタリアートの階級としての階級が自己目的となることによって労働は自己目的へ、そして自己規制へ転化する。」「人間主義は人間主義の完成として自然主義であり、

自然主義は自然主義の完成としての人間主義である。人間主義と自然主義の統一、これである。」等々。要するに彼の全理論は、觀念に軍を結合しようとする徹底した日和見主義である。「『赤軍』の死滅は、党の指導にもとづいて共産主義運動が社会の動かしがたい勢力に成長し、人々の支持と共感が生まれることによつて死滅する。」我々は赤軍を建設しなければならないと言っているのだ。

このような田原芳の觀念論と経済主義は、底なしの泥沼に落ち込み、マルクス主義からの後退を余儀無くされている。そしてこの後退は、具体的にはプロレタリア独裁の言葉上の承認と実際上の否認に転落しているのである。「プロレタリア独裁の最高峰の本質、それは党に導かれた『無償労働の組織化』、労働過程における共産主義運動である。この党の指導に導かれるものこそコミューン・ソビエトであり、この大衆組織である。ブルジョア権力を打倒する課程で形成されたソヴィエト・コミューンを、労働組合や国家機構に転化させるのではなく、共産主義運動に転化しなければならぬ。これこそプロレタリアートの独裁の最高峰の本質である。」この言葉において、田原芳の犯罪性は、ほとんど全てが言いつくされている。まず第一に、共産主義について彼自らが引用したマルクスの言葉を、今ここにおいて忘れてしまっていること。もう一度引用しておこう。「共産主義は、われわれにと

って成就されるべき何んらかの状態、現実がそれへ向けて形成されるべき何んらかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を共産主義と名づけている。この運動の条件は、いま現にある前提から生ずる。」第二に、正に共産主義運動が現状を止揚する現実の運動であることを想定するならば、「無償労働の組織化」を金科玉条として党の任務に据えることは、明らかに党を歪めることになる。そしてこの党組織論での誤ちは、マルクス主義からの脱落を基として進められている。ここで取り扱われている「無償労働の組織化」なるものは、革命戦争の時期とまたはそれ以降の歴史についての具体的内容が語られていない以上、ここでは要するにマルクス主義からの後退——「労働価値説」への一步後退として受け止めなければならない。そして第三に、党の指導による「無償労働の組織化」を「ソビエト・コミューン」といい、それが「プロレタリア独裁の最高峰の本質」とされるとき、我々は著者田原芳を、プロレタリア社会主義革命の、共産主義世界革命の裏切り者と呼ぶのである。

プロレタリア革命の裏切り者は、またもや「現代ソビエト運動」と題して、直接的に現代世界を分析する上での誤りを露呈した。「プロ独は暴力なしには不可能であるが、暴力だけではなく、また暴力を主とするわけでもない。プロ独の主要な質は、前衛党に代表される。『プロレタリアートの組織と規律』にある。」

たしかに、プロレタリア独裁は、平和的な過程もあれば、内戦や革命戦争という暴力的な過程をも意味しているであろう。しかし、問題は次のように提起されている。彼の「プロ独は暴力なしには不可能であるが、暴力だけでなく、また暴力を主とするわけでもない」という見解と、「プロレタリア独裁は暴力である。」という見解が設定されている以上、我々は動揺することなく後者の見解を採用するものである。このような見解を堅持し、「プロレタリアートの組織と規律」というプロレタリア独裁に準じた形態でもってりっぱにやり遂げることが出来るのである。田原芳の見解は、明らかにマルクス主義からの脱落——すなわち、重農主義的価値観と労働価値説とナロードニキの経済主義的浪漫主義——によって基礎づけられている。それは、彼の往年の作「プロレタリア独裁への道」を参照すればなおさらはっきりするであろう。そして、この著作においてもこのように結論づけている。「プロ独の最も主要な本質というのは、この党の共産主義運動として展開される目的意識的な無償労働の組織化にあるといわなければならないだろう。」我々の立場においても革命党を建設しなければならないことは確認済みであるし、また多くの党派も革命党の建設にとりかかっているということは衆知のことであろう。ところが田原芳の見解は、明らかに問題を歪め、本質を曖昧にし、誤魔化していると言わざるをえない。まず我々が綱領と

して考えなければならないことは、党は数あれど、どのような党なのか、党の最終目標は何なのかということではなかったのか。そのような最終目標を明確にしない以上、階級意識の高揚も意識も規律も望みえない幻想にすぎない。にもかかわらず、彼は、そのような本質的な問題——党の最終目標は何にあるかを明確にすることなく、「党」は、「共産主義運動」として「目的意識的な無償労働の組織と規律」を全うしなければならないという事の本質を隠蔽しているのである。我々の見解によれば、党とは蜂起の党であり、その本質上軍でなければならない。そのような党こそ、労働者階級を意識化し階級的自覚を押し進めることができるのである。

このような改良主義と経済主義にがんじがらめに縛られた田原芳は、現代世界階級闘争についても徹底した小ブル的対応を続ける事実を反した解釈主義的社會学に逃亡してしまつた。「『労働者・住民の武装』の問題は労働組合のストライキ・サボターージュをはじめとし、クローンシュタットの反乱を頂点として武装解除され、その抵抗権は集会の禁止から争議権の禁止等々によって失い、『住民の武装』は解除された。そしてこれに替って国家治安警察が強化・拡大された。」これが「無政府主義・組合主義・アナール・コサンディカリズムそして官僚主義の克服」と銘打った綱領委員会への口にする言葉なのか。この言葉こそ世界的に蔓延している

無政府主義者の神話ではなかったか。そしてこのような事実の歪曲は、現代政治について彼の諸見解にも見られるのである。「中国の場合、『文化革命』は階級闘争の一形態としてとらえられ、官僚主義、組合主義批判を、無政府主義のエネルギに依拠して展開するやり方が行なわれたが、それは極めて大きな限界を示した。」これは、中国文化大革命を右から批判したものであり、現代世界革命の条件を全く見失ったものである。もしまじめに世界革命について考えている人であるならば、中国共産党、中国の地において革命を指導し、政権を樹立した最も権威ある党、に対する無原則な批判がどんなに現代世界革命の障害物になっているかに気付くであろう。党についての田原芳の見解、一「権力奪取」の党から「社会主義の組織化」の党への移行、一「同様にここでも「文化革命」に対する反革命的対応がなされている。すなわち、「文化革命」に先行する「政治革命」を見て取ることもなく、「政治革命」と「文化革命」を階級闘争の地平から分離し、次のようなことを喚び起している。「問題は、この『文化革命』の限界を突破するものは何かということであるが、これをわれわれは標準労働日に基づく『義務労働制』にかわる労働の形態（制度の形態ではない）『無償労働の組織化』に求めなければならない」と考えるのである。」これは革命に対する侮辱であり、経済主義であり、改良主義である。こんなことで一体「党は、プロレタリア

何の内容もなく、彼の今までの論述から推測するならばただ口先きだけのことにすぎないマルクスやレーニンの引用の羅列である。そして欺瞞的にも「臨時革命政府」派という触込でもって、それまでの論述に手の掌をかえたように「蜂起の計画とそのため全任務の設定」などと自分には思いも及ばないことを言っている。しかし、それを緻密に考察してみると、彼には次のような欠陥が生じてくる。まず「党組織原則の貫徹は、何がなんでも貫徹されねばならぬ、これなくしては蜂起はありえないし、『権力奪取』など考えられないだけでなく、その前に『非合法』に対し党組織を守り、維持し、発展させることは出来ない。このような党は、危機論、情況分析主義、闘争方針、戦術主義として大衆闘争主義、戦闘主義によっては決して出来ないし、ごたごたとした「ミティングの党」ではどうすることも出来ない。これからの脱皮は、綱領的な、五年一〇年いやそれ以上の長期のそれ故に原則的な意見一致に基づく組織に切りかえることである。こうすることによってのみ、従来の丸抱え的闘争、戦闘をはっきりといくつかの政治・軍事の質の相異にもとづいて独立化させることによって広範な大衆を引き入れることが出来る。これなくして軍事を組織する党などありえない。」ここにおける裏切り者田原芳の第一の誤りは、「党組織原則の貫徹」がないかぎり「蜂起はありえない」「権力奪取などありえない」と言うことによって、論理を逆

トトの自発的な、創造的な組織の発展、成長のために目的意識的な指導を遂行」することが出来るであろうか。彼の見解は、党を一步後退させるものであり、 \wedge 蜂起 \vee に向って立ち上がるプロレタリア人民の前に一切方針を提起することはできないであろう。従来の階級形成の過程は、経験主義的に国家権力に個人がぶつかることによって形成されるものとされてきたが、今やこの経験をもとにして党の最終目標を \wedge 権力奪取 \vee に集中せしめ、 \wedge 蜂起の党 \vee を建設しない以上、一切の自発的な、創造的な組織の発展などありえない。裏切り者田原芳は、マルクス・レーニン主義と無政府主義・アナルコ・サンディカリズム・組合主義との區別をなしているのではなく、マルクス・レーニン主義からの後退、一カウツキー主義・ナロードニキ主義・ラッサール主義・ブルドン主義・重農学派・古典経済学派、一を無政府主義・アナルコ・サンディカリズム・組合主義に對置しているのである。それ故論理は、あちこちでジグザグコースを展開し、ある時にはアナーキズムとの融和やサンディカリズムとの和解が成立したかと思ふと言葉の上だけの世界党、一世界赤軍なるものが登場してくる。我々は、このように現実の世界革命路線を確定するのではなく、綱領を純学問的見地に低めようとするが故に科学としての誤りを続ける新左翼主義の遺産を拒否する。

第四章「自国政府打倒」と「臨時革命政府樹立」の闘い」は、

立ちさせ、本来の問題点、一どのような党が必要なのかということをややふやふにしていることである。すなわち、このことを我々の見解として展開するならば、まさしく \wedge 党が蜂起の党ということにおいて最終目標を決定した党組織こそ、党組織原則の貫徹がなされ、蜂起の諸機関と権力奪取の諸機関が円滑に運動する \vee のである。それ以外に裏切り者田原芳のように無原則に党組織原則の貫徹などと叫んでみたところで、それは要するに日和見主義、現代カウツキー主義に転落した党を維持するために窮々としている浅ましい姿以外のなものでもない。そして今や言葉だけのプロレタリア独裁の権威者に墮した裏切り者田原芳は、次の如く恰好を付けている。「我々は、プロレタリアートの独裁、プロレタリア国家機関の建設と表裏の関係としてのみ党が考える蜂起を計画する。」しかし我々は騙されない。彼がこれまで一貫して述べてきたところのプロ独とは何であったのか。それは以前に示した如く「『無償労働』の組織化がプロレタリア独裁の本質」であった。彼は、レーニンの「何からはじめるべきか」という論文の中から、勝手気ままに「正規の包囲軍」なるものを拝借してきて、その本質的内容、一すなわち党の最終目標を蜂起に設定すべく構想された党組織、一に關しては一語も口に出さずに、ひたすら「労働の組織化」や「党組織原則」などといった実体なき改良主義に席を譲っている。そして、ついに彼自身が否定してき

たアナルコ・サンディカリズムに返り咲いているのである。」

『権力奪取を目標とした蜂起』の軍隊の本隊は、革命がプロレタリアート自身の事業である以上、プロレタリア自身が、その本隊である」といって、彼は、かつて革命勢力に対して投げつけられた誹謗・中傷を恥知らずにも自らの口から飛び出させた。この一言こそ、田原芳を右翼秩序派と同列に置くべき必要性を証明しているのであり、我々をして裏切り者と呼ばしめているのである。

裏切り者田原芳の手の内はすでに見えている。「『ナンデモ占拠主義』と『ナンデモ暴力・武装主義』は、愚かなことだけでなく危険で犯罪的なことである」と彼が言った時、我々は彼らから実質上の清算主義と暴力革命の意義の抹殺を見て取らざるをえない。確かに「一般的占拠闘争」や「一般的武装闘争」をすでに古いスローガンとして確認しなければならぬであろう。しかし、今やこの六〇年代における革命的プロレタリア英雄主義を我々は党に結実せしめ、一般諸闘争を単一の組織され、統一された革命戦線でもって蜂起を勝利に導かなければならない。「我々は、革命的前衛党が指導しなければならぬのは、『中電マッセンスト』において貫徹されたように『賃金奴隷制度の廃棄』と言うことではない。」「我々はこのように、共産主義者同盟綱領委員会の正式の見解であるならば、我々はこのような『プロレタリア国際主義と組織された暴力』に対する清算主義的・右翼的遺産を拒

否するものである。

第五章は「正規の包囲軍を組織せよ」——赤軍派の悲劇とその教訓——となっている。我々の見解によれば、共産主義者同盟からの赤軍派の脱退と党派闘争は、極めて未熟なものとして具体化し組織的未分化のままに今までに到っていると考えられる。

共産主義者同盟の悲劇に関して我々赤軍派は、出来る限り赤軍派の分派闘争を保障しなければならない。また社会主義軍隊Vと先進国プロレタリア軍団Vと民族解放戦線Vとの革命的結合——単一の世界革命戦線——を、世界党II世界赤軍(我が党)に結実せしめるために目標を蜂起に向けて準備する我々の隊列に歓迎しなければならない。我々は、何も共産同赤軍派に味方する立場でもないが、共産同綱領委員会の日和見主義を暴露しなければならないのである。

「日本の階級闘争に対し、階級の軍隊の必要性の主張と、その実行が果たした役割を忘れはしない。だが我々にとってどのような軍隊が必要であるか、という問題をめぐって、我々は、プロレタリア階級の内部に深く根を下した革命の軍隊が『正規の包囲軍』の建設が、党細胞がそのまわりに大衆を結集してつくりあげねばならない。そして細胞が、『正規の包囲軍』になることができるような党中央の変革が軍隊を指導できる党へ脱皮されねばならないと考えるのである。」「党の本隊、階級的党の軍隊における本

隊は、プロレタリア階級の内部に建設されるのであり、それから切斷された中央軍として建設されるのではない。軍の本隊には、前面、

両翼、後方にそれぞれの任務を負わされた特殊な小部隊が必要なのは言うまでもない。」「このように軍事に対する恐怖心と猜疑心だけが唯一裏切り者田原芳の生命なのである。このような論述こそ現実の階級闘争を固定されたものとして切り縮めているのである。まさに彼が「赤軍派」を「ブルジョア軍隊以外にありえない」と発言するとき、彼はあの忌まわしき革共同革マル派の見解(赤軍IIクーデター)と同列の水準に墮落し、我々にとってさえ前身ともいえる日本共産主義者同盟の赤き伝統を一抛に清算していると言わざるをえない。ここに到って、我々は共産主義者同盟綱領委員会を名乗る田原芳裏切り者集団に対して軍隊をもって内戦することを宣言する。

要するに裏切り者田原芳は、すでに獲得された日本赤軍を「プロシズム」であるとか「ボナパルチズム・レジーム」であるとかいった御託を並べてだらだらとおしゃべりを続けているにすぎない。このような田原芳の不真面目な態度は、全世界人民の、共産主義世界革命の敵である。そしてまた、革命キューバと中国共産党に対する侮辱は、決してただ事に終らないであろうことを綱領委員会に、今度から考慮に入れるようにしたまえ。代償は必ず返えってくることになるだろう。我々赤軍派は、必ず共産主義者同

盟綱領委員会田原芳裏切り者一派を粉砕するであろう。

ではどのように田原芳は革命キューバと中国共産党を侮辱しているのか?「キューバがおかれている国際国内状態を考えた場合……決定的役割を果たすとは考えられない。(キューバの人口・産業・生産力・その政治的軍事的な地理的条件etc)」「中国の場合、極東が決定的な生命線として浮び上がった場合のような政治的條件を除けば、国策の基本は、『自力更正』にあり、他国にたよって革命を起そうというような部分を、あまり信じないであろうし(これは全く正しい)、仮りに、援助をしたとしても中国にとっての戦略的利用価値からであろうし、世界同時革命の大業から見た場合、中国がそのような役割を買って出るには、我々は、なおしばらく世界的な党派闘争を貫徹する以外にない。」「すなわち革命キューバ、革命中国においても経済的な理由から革命援助を行えないであろうというのである。にもかかわらず田原芳は次のように言う。「キューバの革命的な日曜労働(無償労働)、中国の紅軍の革命的な平等主義、等々に見られる、共産主義運動である。我々はその革命性の影響を評価し、これと結合しなければならぬ。」「これらのことを結合して考えてみるならば、こうなる。日本プロレタリアートが革命キューバと革命中国に結合するためには、日本プロレタリアートの無償労働を押し進めなければならぬのであり、それが党の任務である、と、何んという笑いぐさ

だ。この止めもない底なしの改良主義者田原芳は、一切世界革命戦略を語ることなく、無償労働運動によって共産主義世界を獲得できると言っているのである。ここに全てが明白になった。彼、田原芳の語る「現代革命の条件と社会主義」なり、「プロレタリア独裁」なり「世界党・世界赤軍」とは、「無償労働の組織化」であり、現代の戦争と革命と権力闘争に的を当てたものでは決してない。「蜂起を弄るはならない」と。この言葉は自らが蜂起の準備を進めてこそ言えるのであり、裏切り者田原芳にはその資格は一切ない。すなわち、ここで問題になっていることは、「蜂起を準備する党」を建設するのか、それとも「無償労働を組織する党」を建設するのか、問題は厳として動かない。共産主義者同盟の運命は、これで決した。共産同は、綱領委員会田原芳裏切り者一派を介して世界階級闘争から脱落したし、将来世界革命戦争の前に反革命として登場してくるであろう。たとえば、世界共産党を指すという綱領委員会が、「ソ連は、世界革命戦争の『武装根拠地』とはなりえていないばかりでなく、反革命的役割を果している」と言うのである。では我々の革命は、ソ連に対する反乱となるのであろうか。我々の見解によれば、今次の武装蜂起と日本社会主義政権はあくまで共産主義世界革命の直接の序曲としてあると考える。彼は「現実の世界の階級闘争にはたしている役割を具体的に分析し、それにもとづいて評価を与え、対応しなけ

る。」「正規の包囲軍を組織せよ」「我々は、大衆から党を分離し、又逆に党から大衆をひき離すようなことをしてはならない。そうではなく、工場、職場、学校、地区、住区、居住区の中に、プロレタリアートのいるところ、どこにでも、細胞を建設しなければならぬ。細胞は、最少の政治の単位であるだけでなく、それが党の基本的組織であるのは、決して大衆闘争のためだけでなく、それが三〇五名で構成される所以は、それが人民戦争の基本的な軍事、その原則にかなった組織単位でもあるからだ。」「我々が一打による電撃的な革命を夢想することが出来ない以上恒常的武装闘争を基本とし、『遊撃戦』を現段階の軍事路線としなければならぬし、そして、このような段階における組織活動の基本は、政治的・軍事的になによりも第一義的に細胞の建設であり、革命の正規の包囲軍を組織することではなければならない。」「ここでの

ればならない」といって、「ソ連は反革命である」という結論に達している。多分、この根拠には、クロンシュタットやハンガリーやチェコや平和共存政策があるのであろう。しかし考えてもみたまえ、ソ連共産党は、ロシア革命を勝利に導いた唯一の党でも権威ある党である。それは、日本共産党のような全くの小ブル政党ではない。彼らは、最大の武装と最大の社会主義軍隊さえも擁しているのである。国際改良主義は、ソ連共産党と日本共産党の区別さえ理解できず、小ブル小児病でもって「反スタ」とか「反トロ」とかいった今や博物館の屑籠に入れるべき改良主義に陥り必然的に国際分裂主義へと突進していくのである。こんなことでは、一切あの国際分裂主義の日共から革共同に致る隊列と全く変りがないではないか。往年の共産同の唯一の正しさ——プロレタリア国際主義は、現代過渡期世界として「労働者国家の階級闘争」「先進国階級闘争」「後進国階級闘争」の結合としてあったのであり、今だ反スタ的内容があったとしても革命的レーニン主義を守ったものであった。そしてその事は、世界革命戦略としての世界革命戦争と武装蜂起の問題点から、「赤軍派」をして「世界武装プロレタリアート」として結実したものであった。しかし、その本質上、「赤軍派」の「世界武装プロレタリアート」が、社会主義軍隊に対するサンディカリズムの対応であり、

裏切り者の手品は功妙である。要するに彼の言っていることは、「正規の包囲軍」と「人民戦争」と「恒常的武装闘争」とである。この三つの言葉に限ってみても、彼のやり方は片手落ちであり、マジックである。第一に「正規の包囲軍」とは、レーニンが、一九〇五年革命に向けた党派闘争の中から引き出してきた党の正規軍の思想であり、その最も基本的な問題点は、その正規軍を擁する党が緊急の問題としてその最終目標を武装蜂起に決定したという一点において意義を持つてくるのである。これが、ボルシェヴィキ党の全内容なのであり、裏切り者田原芳は、その一方（蜂起の党）を隠蔽するために他方（正規の包囲軍）だけを前面に押し出しているのである。このように党が決定的な結論を出さずに、正規の包囲軍を組織するなどとは、このことこそ、軍の一人歩きでなくて何であらうか。第二に「人民戦争」とは、中国や東南アジアのような植民地・半植民地における革命闘争の形態であると限定しなくてはならないのか。いや裏切り者田原芳でさえ認めるように、先進国革命闘争といえども「人民戦争」を放棄してもよいという理由は一つもない。我々が主張する「革命戦争」とは実質的に社会主義戦争である。しかし、我々は、裏切り者田原芳のように「組織単位」が大衆と結合しているかいないかという問題として社会主義戦争を規定しているのではなく、蜂起の党が全世界の社会主義戦争とどこまで結合できるかによって

△人民戦争Vの世界的規定を行わなければならないのである。

第三に「恒常的武装闘争」とは、田原芳の言うように、「電撃戦」が不可能な限りでは、「遊撃戦」を段階的に構築していかねばならない、という範囲においては正しいことである。しかし、他方で「恒常的武装闘争」は、△△蜂起の党Vとしての確定がなままに、無限大にロマン的なソビエト・コミューン論に席を譲らざるをえないという大衆運動主義に墮する必然を体内に孕んでいる。逆に言うならば、地区ソビエト・解放地区、革命根拠地が現実存在していない以上、「恒常的武装闘争」は不可能である。

蜂起の党Vボリシェヴィキ党の建設者、ロシア社会主義革命の指導者レーニンが、△△暴力なしには独裁は不可能であるが、独裁は暴力を意味するばかりではなく、また旧来の労働の組織よりも一層高度な、労働の組織を意味するV△△プロレタリアートの独裁は、……搾取者に対する暴力だけでなく、また暴力を主とするわけさえもない。この革命的暴力の経済的基礎、その生命力と成功を保障するものは、プロレタリアートが資本主義に比較して労働の社会的組織の一層高度な型を代表し、これを実現するということである。ここに本質がある。この点に共産主義の力の源泉と、その必然的な、完全な勝利の保障がある。V△△と言うように、これは、道理にかなったことであり、無条件に正しいことである。そしてこの引用は、次のような意味において、時宜に適したものである。

である。すなわち、プロレタリアートとその党は、蜂起を貫徹し、

ブルジョア国家権力を粉砕し、社会主義権力を樹立し、内外の白色テロに決定的な弾圧を加えたならば、共産主義に向っての労働の高度な社会的組織化を計らねばならないのである。しかしながら、裏切り者が次のように語るとき、それは、完全な日和見主義であり、現在蜂起に向って準備されなければならない党の任務を完全に経済主義的に低めるものとしての役割しか果たしていない。

「党に代表される、プロレタリアートの最高の『組織と規律』は、決して、昇華した『党の権威』『党の指導性』一般であってはならないし、あるはずはない。『無償労働の組織化』において実践され、体现され、組織されねばならない。党がそれを指導し遂行するところに、我々はプロ独の最も主要な本質を求めねばならない。第二に、これを基礎とすることによって、はじめて、実体を形成され、維持されるところのソヴェトにもとづく共産主義運動、及びこれを契機とし、基盤として生まれる『生産―消費コミューン』運動がそれである。それは、都市、農村を問わず、闘いとられるプロレタリアートの『労働の社会的組織化』『生産の再組織』である。第三に、プロレタリアートの最高の『組織と規律』としての党に代表されるプロ独である。」ここで田原芳の論述は、逆立ちして、第一義的なものと第二義的なものとの区別がなく、党の緊急の最終目標としての蜂起の準備と社会主義の組

織化とが混同されている。すなわち、我々の見解によるならば、

武装した△△党の権威V△△や社会主義政府内の△△党の指導性V△△がないかぎり、プロレタリアートの最高の△△組織と規律V△△などといったものは一切存在しない。彼の経済的ロマン主義の例はまだ多く存在するがいちいち掲げることはいらない。

戦争とは何か？革命戦争とは何か？革命戦争とは、まさに共産主義世界革命に向けての権力の問題であり、現在のには国際二重権力に根ざした戦略と戦術の問題である。しかしながら、田原芳の口から出まかせの「世界革命戦争」なるものは純イデオロギー概念として、「世界革命戦争」とは言ってみれば「世界イデオロギー」への改変であることになってしまう。我々が語る△△世界革命戦争V△△とは、現代世界革命の時代の歴史的必然物であり、この現実性に対して△△世界党V△△世界赤軍V△△といった目的意識性が必要であり、この△△世界革命戦争V△△の過程と結果（プロレタリアートの勝利）によってのみ△△国家V△△は消滅していくのであるというのであった。我々は、△△世界革命戦争V△△や△△世界党V△△世界赤軍V△△を一度たりとも弄んだことはない。ここで、

「国家及び階級の死滅のための目的意識的活動、これがプロ独の第一の目的と本質である。」「世界革命戦争は、帝国主義列強の同時打倒に止ってはならない。世界革命戦争は、資本制の生産様式の最高の粹取である『民族国家の廃絶』『国家の常備軍・正規

軍』を一方で共産党の直轄の世界赤軍へ、他方プロレタリア人民

の直接の武装に解体しなければならない。この世界革命戦争は、主要に、ブルジョア民族主義との闘争であり、世界プロ独の樹立によってのみ勝利することができる。世界プロ独の樹立は、すでにロシア革命の過程で示したように、プロレタリアート民主主義の中央集権に対する個人主義・無政府主義・組合主義・アナルコ・サンディカリズムとの闘争を不可避的な党派闘争を媒介としなければならぬ。それ故に、世界革命戦争の勝利は、世界プロ独の樹立においてのみ、すなわち『民族国家の廃絶』と『世界社会主義共和国』の建設においてのみ実現される。これは完全に吉本隆明等々の観念国家論に席を譲ったことであり、完全な国際改良主義であり、小ブル世界主義者のなせる術である。我々の見解によれば、「民族国家」や「国家の常備軍」なるものは、ブルジョア国家に対しては帝国主義軍隊の解体をもって、また社会主義国家にあってはその国家形態が完備されればされるほど世界革命戦争の歴史性と必然性によっておのずから消滅していくであろう。我々が目的意識的に追求しなければならないことは、そのような国家に対するイデオロギー的な、思想的な、観念的な対決ではなく、第二義的なものとしては重要な位置にあるのだ

が、権力の問題としての党の最終目標の設定、武装蜂起の貫徹である。このように裏切り者田原芳は、その党派性

においては新左翼特に共産同諸党派ソビエト論と全く変わるところなく、新左翼主義の日和見主義・国際改良主義・国際分裂主義を最も高度に表現している。△△世界党▽▽とは、世界革命戦争の戦略・戦術であり、組織は△△世界赤軍▽▽である。そこにおいてのみ、プロレタリアートの教育、社会主義諸国家の止揚・世界社会主義が現実のものとなるのである。

第六章は、「『左翼反対派』批判」という見出しになっており、小ブル学者岩田弘「前衛派」に対する批判である。我々は、小ブル岩田弘一派を擁護しようなどはさらさら考えていない。岩田弘の裏切り——「世界資本主義—超国家主義論」への逃亡——は、すでに明らかであり、彼が「蜂起」と言ったところで、個人的見解としてはともかく、党の公式の見解としては誰も相手にしないのも明らかである。この章において、面白いことには、小ブル岩田弘一派に対する小ブル田原芳の対立であり、そこから引き出される裏切り者田原芳の奇妙な発言である。彼の若武者ぶりは、次の言葉に見取ることができるであろう。「革命の真髄・党の指導の真髄は、……権力奪取を目標とする目的意識的な蜂起の計画であって、これに向けて全勢力を結集し、集中する点にあり……」これは、彼の今までの論述の中では見出されなかった言葉であり、たとえば第一章の「綱領問題」には「全人民の武装」と「世界党—世界赤軍」が一足跳びに同じものとされている。にもかかわら

ず、裏切り者田原芳さえ、「蜂起の計画」といったことを言わざるをえないのである。それは、単に情勢が要求しているばかりではなく、現在の党派闘争全体がその方向によってしか決着がつかないことを表わしている。

「武装工場占拠闘争」これは労働者がしなければならないことであり、党は指導しなければならない。そしてこのような闘争はすでに存在するし、その形態をまさにサンディカリズムとして開花させている。小ブル岩田弘「前衛派」諸君！そこで我々は、その労働者の闘争の地方性・排外性・改良性を単一の党のもとに止揚しなければならぬと言ってきた。「武装工場占拠闘争」をいから世界的に拡大したところで、それは、現代世界革命の問題点——戦争と蜂起の問題——すなわち全人民的政治課題に到達することはできないであろう。明らかに「前衛派」は、現実の国際政治から、世界革命戦争から取残されるであろう。しかしながら裏切り者田原芳は、この「前衛派」の地方性やその経済主義を正しく批判できずに、何の根拠もない事実の歪曲に精を出している。たとえば次のように。「日本階級闘争に関して言えば、戦前のアナルコの闘争に源泉をもち、戦後の『工場占拠・生産管理闘争』にその典型を示している。この場合、戦後の政治・経済・社会的激動・国家権力の崩壊状態という革命的条件がありながら、それが敗北したのは、日本共産党の『民主主義革命』戦略に最大の原因がある。現在の我々は、△△プロレタリア社会主義革命▽▽から△△共産主義世界革命▽▽へ、△△社会主義軍隊▽▽△△先進国プロレタリア軍団▽▽△△後進国民族解放戦線▽▽の革命的結合を△△世界党—世界赤軍▽▽へ、世界革命戦争勝利の世界革命戦略の規定と、△△暴力革命と武装▽▽の導入を△△蜂起の党▽▽として結実せしめねばならない。裏切り者田原芳と日本共産党との関係は、田原が、口先だけのプロ独で△△プロレタリア革命▽▽を裏切っているとするならば、日本共産党は、口先だけの民主主義をもって△△プロレタリア民主主義▽▽への発展を阻害している、ことである。そして、この両者と岩田弘の三つ巴の苦闘は、「社会主義の組織化」「民主連合政府」「武装工場占拠」といったロマン主義という一致点を見出している。△△蜂起の党▽▽の組織化と△△赤色政権▽▽と△△世界革命戦線▽▽を形成する先進国一大プロレタリア軍団の組織化こそ現在緊急な問題として提されているのである。裏切り者田原芳は、「目的意識的な蜂起の計画」といいつながら、革共同と同じく改良主義・経済主義へと転落していくの

因があるとしても、問題は、この革命戦略の構想が、まさしく裏腹に『工場占拠—生産管理闘争』としてあった点に、この革命戦略の実体があったのであって、それ以外ではありえないということである。」「日本共産党の『自衛武装闘争』の敗北の教訓も同様である。それは『ブルジョア革命』『民主主義革命』という権力規定とその戦略だけを変えて、暴力革命と武装を導入することによって解決されるのではなく、そこに根ざしている大衆運動主義・自然発生的な革命観、民主主義を媒介とした、下からの発想、これに支えられた、基本的な方法、組織方針、路線にまで深められて克服されねばならないのである。」「ここでの田原芳の誤りは、第一に、「工場占拠」を媒介にした「民主主義革命」から「プロレタリア社会主義革命」への必然的な発展過程を見殺しにするという小ブル的発想であり、第二に「権力規定とその戦略」を変えて、「暴力革命と武装」を導入することが、自然発生的な革命観であり、大衆運動主義であるとする戦略・戦術の党・武装蜂起の党の小ブル的否定である。我々の見解によれば、第一の問題に関して、日本共産党は、第二義的課題である「民主主義革命」から第一義的課題「プロレタリア社会主義革命」に到達することなく、「民主主義革命」からブルジョアジーの攻撃に耐え切れず、前衛党を、ブルジョア政党にまで低めていったのであり、その点に関して我々の批判は、最大限に發揮されねばならない。しかし、

である。最後の第七章は、それを最も明るみに出してきている。武装蜂起にブルジョア経済学者宇野弘蔵や小ブル急進主義ブーリンやトロツキーが何故登場してくるのか？我々が唯一確認しなければならぬことは、今やレーニン赤軍のポーランド進撃が甦りつつあり、ここかしこにおいて革命戦争が成熟しつつあり、それは唯一単一の世界革命戦争へと発展するであろうということである。

裏切り者田原芳共産主義者同盟綱領委員会一派は、明らかに従来の共産同から一歩後退している。これは、現代革命戦争と国内戦の必然の結果であり、革命と反革命の相乗的關係として存在する。裏切り者田原芳は、今や日本共産党をも含めた新左翼主義運動と同じ、ラッサール主義・ブルードン主義・カウツキー主義・第二インター主義・国際改良分裂主義に転落してしまっている。

裏切り者田原芳共産同綱領委員会一派は、以上のように全般的に反帝国際主義とプロレタリア国際主義を独自の世界党Ⅱ世界赤軍に高めることなく、帝国主義の出兵を待つばかりである。「敵の出兵」とそれに見合う戦略・戦術は、「敵の出兵」を規定する独自の世界革命戦略がないかぎり存在しないのであり、反帝主義「敵の出兵」論は、最終的には第二インター主義に転落せざるをえない。それが証拠に、ロシア革命の過程は、 \wedge 蜂起の党 \vee ↓ \wedge 戦争 \vee ↓ \wedge 蜂起 \vee として煮つまっていったのである。独自

そしてこの分裂こそ、同盟がいかに小ブル的組織であり、その小ブル性を払拭し切れずにいるかということを確認に示しているのである。共産主義者同盟神奈川県委員会「左派」グループは、そのような同盟の小ブル性を最大限に發揮したものの一つに数えられよう。「左派」は次のようなスローガンを掲げている。「党内論争Ⅰ党内闘争Ⅱ党の革命に大胆に着手せよⅢ」。「共産主義を指す永続世界革命戦争をⅠ」。「帝国主義の反革命侵略軍事体系を解し世界革命戦争の陣型を創出せよⅡ」。「ソヴェト運動論を止揚し革命戦争統一戦線を構築せよⅢ」第一のスローガンに関して我々は「党の革命」を「政治革命」として打ちかためなければならぬといってきた。すなわち、「党の革命」を同盟内論争形式として捉えるのではなくして、「党による革命」「政治革命」「蜂起の党」として大胆に提起し着手しなければならないと語ってきた。「党内論争」「党内闘争」は、共産同にとって欺瞞的でありえないであろう。「党の革命」Ⅱ「党による革命」Ⅱ「政治革命」Ⅱ「蜂起の党」は、共産同内闘争としては絶対にありえないものである。「党内論争Ⅰ党内闘争Ⅱ党の革命」は、主観的願望にもかかわらず、客観的には清算主義であり、解党主義である。今やサークル主義は、完全に破壊されなければならない。第二のスローガン「共産主義を指す永続世界革命戦争をⅠ」は、党の火急の最終目標を隠蔽するものであり、党の立場を不明確な

の世界革命戦略によってのみ国際反帝闘争は存在するのであり、世界党Ⅱ世界赤軍によってのみ世界革命戦略は物質化されるのである。しかしながら田原芳は、このような党の任務を完全に放棄し、プロレタリア独裁を裏切り、プロレタリア独裁の政治的意義を完全に後方に追いやってしまった。それも現在のようにその政治的意義を明確にしなければならぬ時期にある。裏切り者田原芳の口から出まかせの「世界党Ⅰ世界赤軍」「世界革命戦争」といった虚構なるものを弾劾し、赤軍兵士は独自の世界戦略Ⅰ \wedge 社会主義軍隊 \vee \wedge 先進国プロレタリア軍団 \vee \wedge 後進国民族解放戦線 \vee の革命的結合Ⅰのもとに \wedge 世界党Ⅱ世界赤軍 \vee を建設し、 \wedge 蜂起の党 \vee の内実を世界革命戦争勝利・蜂起貫徹に結実せしめなければならない。

革命的レーニン主義のもと、赤軍党に結集せよ！！

「左派」を名のる 小ブル「右派」

共産主義者同盟の分裂は、實際上必然的な出来事であり、同盟の不十分性と党の必要性を示したものであるといわねばならない。

ものとせざるをえない。確かに世界革命戦争は、共産主義世界革命として開花するものである。しかし、我々がなすべきことは、世界革命戦争を組織し、組織するために世界人民の前にとどのような党を提示するかということに集約されるのが当然である。すなわち、何を最終目標として社会主義権力を樹立し、共産主義世界革命へと永続化させていくかという問題に集約されるのである。又逆にいうならば、共産主義世界革命の過程と内実における世界革命戦略を何によって保障するのかという問題に行き着くであろう。それ故第二のスローガンに対して我々は、武装蜂起を最終目標とした党Ⅰこれこそが世界革命戦争を現実のものとして獲得出来る唯一のものであるⅠを主張しなければならない。第三のスローガン「帝国主義の反革命侵略軍事体系を解体し世界革命戦争の陣型を創出せよⅡ」は、従来通りの反帝闘争を世界革命戦争へとというパターンを踏襲したものであり、攻撃型世界階級闘争Ⅱ世界革命戦略戦術を一般的武装闘争に低めるものである。一般的武装闘争、すなわちここでは「反革命軍事体系の解体」は、一般的スローガンにおいては「全人民武装」と同様に効力のあるものだが、現在のように世界革命戦争を領導しうる党建設が第一の問題に絞られている以上、「蜂起の党」によってのみ戦争が存在するということを忘れてはならない。第四の「ソヴェト運動論の止揚」にしてみても同じことがいえるのであり、従来の党内

闘争主義やロマン主義的組織論や反帝主義や統一戦線運動等々の繰り返えしであり、総じて現在要請されているスローガンではない。第一のスローガン「党内論争」党内闘争は党の革命に大胆に着手せよ」に対する我々のスローガンは、**「人日和見主義」社会会排外主義」国際改良分裂主義」新左翼主義集団（日共を含む）」**を粉碎し、赤軍党建設に大胆に着手せよ」である。第二のスローガン「共産主義を目指す永続世界革命戦争を」に対する我々のスローガンは、**「人革命戦争武装蜂起を最終目標とする党」蜂起の党」赤軍党を」**である。第三のスローガン「帝国主義の反革命侵略軍事体系を解体し世界革命戦争の陣型を創出せよ」に対する我々のスローガンは、**「人世界革命戦争の陣型（これは現在の不可能だということが必要ではなく、これこそが必要だということが必要なのである。）」**単一世界革命戦争」世界党」世界赤軍を建設し、全世界帝国主義を打倒せよ」である。第四のスローガン「ソヴェト運動論を止揚し革命戦争統一戦線を構築せよ」に対しては、我々のスローガンは、**「人全世界コミューン・ソヴェト派」世界社会主義プロレタリア独裁派」世界赤色政権派を統一し、世界党」世界赤軍による単一世界革命戦線を構築せよ」**である。このような我々のスローガンは、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン・毛沢東の教義、総じて革命的レーニン主義によってのみ可能な叫びなのである。

「なにをさておき次の戦闘を計画し、実行しなければならぬ」ということほど、革命家を、プロレタリアを、大衆を鍛え上げるものはない。ただこのことに関して、我々は、一般的な武装闘争、すなわち「なにをさておき次の戦闘を……」という志を最後まで徹底的にやり遂げられない闘争の無計画性、排外性、地方性から脱却しなければならぬと言っている。この二つが意味することは、要するに党とは戦闘組織であり、軍隊であり、戦術・戦術の党であり、蜂起の党であるということである。

「現代革命の党はレーニンの（特に「なにをなすべきか」的時代を規準にした）党の現代的模写では決定的に不十分であること。我々の党は何よりも世界革命戦争に勝利する共産主義者の党でなければならぬこと。」「宣伝の党、理論啓蒙の党、武装蜂起の党、これらは党の側面にすぎない。党は共産主義社会の原型であり、それらを予見する綱領・規約を現に実践する人間」共産主義者の組織である。綱領は党という人格の『存在総体』を意味づけ規約はその行動規範を示さなければならない。」「これは偉大な世界革命家レーニンに対する冒瀆行為であり、許さるべきものではない。これは、共産主義者の党、という言葉に名を借りたブルジョア・インテリゲンツィアのサークルに相違ない。現代革命の党にとって、ローザではなく、トロツキーではなく、プーリンではなく、決定的に唯一レーニンの現代的模写が必要であ

「序文Vにおいては、この書共産同神奈川県委員会の「左派」の発行に関する趣旨文や将来の発行計画に対しての説明が載っており、そして、その分派闘争に関する言い訳が簡略に記されている。そのために、誤りはより明確となってくる。」「我々の合言葉は永続世界革命戦争の飛躍的継続、それと不可分一体の、共産主義者の党」の建設である。更に我々にとって、党の革命、が強調的であるのに「何をさておき次の戦闘を……」という主体革命党抜きに戦術主義に対する警告に於いてそうなのであって、両者の時差調整を意味するものでない。」「ここに示されていることは一体何なのか？明らかである。」「党の革命」」「共産主義者の党」」「主体革命党」。これは、従来の共産同の精神「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」からの一歩後退であり、革共同日和見主義一派への一歩接近である。我々が必要としているのは、戦術・戦術の党である。すなわち、戦術・戦術を媒介とする**「人党」重Vの思想の堅持である。それはなかなしく、軍があつて、戦術・戦術があつて、党があるということになる。党があつて、軍がないことが誤りであること、すなわち戦術・戦術を無条件に軍のない党に当てはめることが誤りであることには大体において無頓着である。次に「なにをさておき次の戦闘を……」**ということは、ギマン的な「共産主義者の党の建設」よりはるかにすぐ

り、そのことによってのみ発展形態は勝ちとられるのである。それでは次に「世界革命戦争に勝利する共産主義者の党」とは何か。我々の見解によれば、なかなしくそれは、**「宣伝の党、理論啓蒙の党、武装蜂起の党」**である。しかし、この著書によれば、それは「党の側面」にしかすぎなく、「党は共産主義社会の原型であり、それを予見する綱領・規約を現に実践する人間」共産主義者の組織である。」「ことになってしまふ。これは党に関するロマン主義であり、いわゆる革共同党組織論であり、手工業的党組織論であり、言葉の遊びである。党が共産主義社会の原型であり、社会主義と帝国主義の分裂が新たな段階」共産主義社会の原型であるところに現在存在する。」「党内闘争」」「党の革命」」「党の共産主義社会への原型化」。今や「井の中の蛙、云々」と言った本人も、またその支持者も一切合切「井の中の蛙、云々」に愛質してしまった。「綱領は党という人格の『存在総体』を意味づけ規約はその行動規範を示さなければならない。」「我々は『党の革命』『党の建設の任務』を当面綱領、規約、党建設の為の論争とそれに応じた実践的な消化能力を持った党員の輩出におく。綱領、規約の文章提起だけでは不十分であり、それを党員生活として実践することの出来る人間」共産主義者の形成、及びその効果的な配置の問題にまで、掘り下げること。」「何を血迷ったのか、この著者は、小学校の修学旅行についての訓示を提出

る。」「我々の合言葉は永続世界革命戦争の飛躍的継続、それと不可分一体の、共産主義者の党」の建設である。更に我々にとって、党の革命、が強調的であるのに「何をさておき次の戦闘を……」という主体革命党抜きに戦術主義に対する警告に於いてそうなのであって、両者の時差調整を意味するものでない。」「ここに示されていることは一体何なのか？明らかである。」「党の革命」」「共産主義者の党」」「主体革命党」。これは、従来の共産同の精神「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」からの一歩後退であり、革共同日和見主義一派への一歩接近である。我々が必要としているのは、戦術・戦術の党である。すなわち、戦術・戦術を媒介とする**「人党」重Vの思想の堅持である。それはなかなしく、軍があつて、戦術・戦術があつて、党があるということになる。党があつて、軍がないことが誤りであること、すなわち戦術・戦術を無条件に軍のない党に当てはめることが誤りであることには大体において無頓着である。次に「なにをさておき次の戦闘を……」**ということは、ギマン的な「共産主義者の党の建設」よりはるかにすぐ

している。我々が必要としているのは、世界革命戦争への旅について訓示である。この著者によれば、「党」は「人格の存在総体」であり、「綱領」はこのことを「意味づける」のであり、「規約」は「人格の存在総体」の「行動規範」であることになる。これは完全なブルードン主義であり、観念論であり、一度でも共産主義思想の歴史をひもといてみればわかりそうなものである。たとえばオーウェン主義やフリーエ主義やカペー主義等々が想い出されるであろう。このような意味合いにおいて、共産同神奈川県委員会「左派」グループが活動するとするならば、明らかに「綱領、規約の文章提起」に終始するだけで「充分」であり、賢明であろう。諸氏がそれ以上に出すぎた真似を意図するならば反革命としてしか登場できないであろうことを我々は結論として述べておく。たとえば、革マル派のごとくに。

綱領・規約はオモチャではない。綱領・規約とは、党の戦略・戦術を公式なものとして黨員並びに人民大衆の前に提示するものであり、党の様式一般や方法一般を弄ぶものではない。著者による規約問題とは次のようになる。「規約問題は、戦争の時代における共産主義に連結する政治的・軍事的・社会的・イデオロギイ的解放域としての党——軍としての実体的確立の前提をなす党内における共産主義の実現——分業の固定化の撤廃、平等主義の実現を意味するのである。」このことが意味することは、も

と言っているのである。その意味では、我々は戦略・戦術主義であり、テクノクライト主義である。我々は、哲学・思想主義や軍事情神主義や空想主義がはびこっている以上、そのように呼ばれる名譽に浴そう。

「革命戦争—内戦に向けた党—軍の機能化が、共産主義をその内部で実現しつつある組織体として登場せざるを得ないのは、単に国家権力に対する軍事的、政治的解放域としての党—軍たらざるを得ない、ということのみならず、この党—軍、その団結が、世界プロ独の共産主義社会移行の基礎ともなるからである。」これは奇妙な論述であり、インテリゲンチヤ特有の言葉の遊びである。「革命戦争—内戦に向けた党—軍」は、我々の常識によれば、「その内部で共産主義を実現する」のではなく、革命すなわち権力の問題として「共産主義を実現する」のである。すなわち、一般的に「党—軍、その団結が、世界プロ独の共産主義社会移行の基礎となる」のではなく、蜂起の党—軍が、「プロ独」の基礎となるのである。「左派」の主張は、サンディカリズムの党組織への持ちこみ以外の何ものでもない。「その内部に共産主義的原理を実現している党—軍は、自らを起点に、帝国主義権力との世界革命戦争—内戦を戦うと同時に、自らの団結をもって、全世界人民の武装に向いつつある革命戦争統一戦線下の大衆を教育し、物質的には資本主義的商品経済に立脚しても、政治的、組織的に

はや規約問題一般ではなくして、すでに綱領・規約の提起に移っていることである。これは、規約問題一般の提出に名を借りた、綱領・規約の日和見主義的歪曲である。「党内における共産主義の実現——分業の固定化の撤廃・平等主義の実現」。これが共産同神奈川県委員会「左派」の論述の骨子であり、あつかましくも「我々は、六〇年ブント以来、疎外革命論者—党—共産主義の母体——に対して党—階級闘争の手段なる主張をしてきた」と減らず口をたたいている。我々は、「左派」が綱領・規約を弄んでいると同時に、一種の排外主義的組織論・革マル的組織論・空想的組織論をりっぱに提起していることに自覚的であればならぬ。そのことは「左派」の次の論述に決定的である。「共産主義を実現しつつある党——軍を前提としてのみ、黨員の情熱と生死を問わぬ献身性に基づく極限的人間の力（物理的・組織的・精神的）が党形態、軍形態を通して一個の党——軍の組織力、軍事力に転化し、綱領——戦略を導きの糸とする対象変革行為——帝国主義に対する国際的党——軍の世界革命戦争として実現する。」革命とはかくも神懸りではない。この論述では、極限的人間の力が主題となっている。しかし、問題はこうである。

「左派」諸君が、共産主義を実現しつつある党が国際的党——軍であることに對して、我々は、蜂起の党—軍—世界革命戦争—戦術の党—軍が世界—世界赤軍の内実を形成する

は、党—軍—統一戦線を通し、党の陣営下に大衆を獲得するのであるが、党—軍と、革命戦争を通じた大衆との関係は、世界—世界赤軍と世界革命戦争統一戦線への関係を飛躍させつつ世界プロ独の共産主義への移行過程においても持続しなくてはならないからである。「精神主義と美辞であふれた「左派」の論述も、ここにこまで来て正体を露わした。すなわち「その内部に共産主義的原理を実現している党—軍」の正体が、はっきりしたのである。精神主義と資本主義的ブルジョアイデオロギーの癒着以外の何物であろうか。「その内部に共産主義的原理を実現している党—軍」は、「革命戦争—内戦」を戦うと同時に、「団結」をもって「物質的には資本主義的商品経済に立脚しても」「党の陣営下に大衆を獲得する」。これが観念論でなくて何であろう。「ドイト・イデオロギー」の前書きにある重力の観念の例を思い出せば明白である。これは、美辞にかかれた「革命プロ—カ—」であり「党」を正しくブルジョアイデオロギーの巢窟にしてしまう動きである。「現代革命の党はレーニンの党の現代的模写では決定的に不十分である」などと言う前に、レーニンの革命党の原則を勉強するべきである。「党」を「理念」に置き換えている「左派」は、「世界—世界赤軍」を言葉の上のみで幾度となく引用しつつも、結局、何んらその内実を形成することはできないのである。「従来我々は、反革命で共産主義からますます離れたストーリー

ン主義に対して、これまで世界革命戦略、社会主義『社会』論、『価値法則の貫徹』等を批判し世界革命戦略をその重点において批判してきた。しかし、全世界での人民の武装が、我々のものに開始されつつあり、世界プロ独とその死滅——共産主義の意識的実現までをも目標とする時、帝国主義やスターリン主義への批判から、同時にこれを批判し粉碎せんとする我々自身の党が、今度は彼らから、そして全世界の人民から問われるであろうことを覚悟しておかねばならない。」何という奇妙な論述か。まずもって彼らの世界革命戦略とやらを聞きたいものである。しかし我々は聞かずとも、『社会主義』『社会』論、『価値法則の貫徹』等を批判し世界革命戦略をその重点において批判してきた」という論述からするならば察しがつく。それでは我々は「左派」諸君にうかがいたいものである。そのような世界革命戦略は、革共同の「反帝・反スタ世界革命戦略」とどのように違うのか？そして、「世界党—世界赤軍」「世界革命戦争」を叫ぶ諸君が、どうして「林彪を次期主席とすることを規約に入れるというような党—軍であるが故に」「中国共産党—紅軍」を「批判」するのか？増々、君達の言う「世界党—世界赤軍」なるものが机上の空論として明白になってきた。いやそれ以上に、世界革命戦争——攻撃的世界革命戦略を小ブル急進主義に譲り渡そうとする有害物である。そして第二に、「党を建設しなければならぬ」現実の前に、ど

うして「世界プロ独とその死滅、従って党の死滅—共産主義の意識的実現までをも目標とする」ということが問題になるのか？何故、「党の死滅」が「共産主義の意識的実現」なのか？「共産主義の意識的実現」とは、「ブルジョア国家権力」を打倒する「党」すなわち▲蜂起の党Vである。「左派」は、このことを完全に逆立ちさせており、「党の死滅」を目的意識として捉えており、結局は、革共同と同様に反スタ論に支えられて底なしの小ブル党組織論・小ブル世界戦略へと転落していくしかない。「世界党—世界赤軍」とは、「社会主義軍隊」と「先進国プロレタリア軍団」と「民族解放戦線」との革命的結合においてしか実現できないものであり、公認の社会主義国共産党や公認の臨時革命政府を汚しでは、決して獲得できるものではない。明らかに「左派」は、革共同同様の「国際改良分裂主義—社会排外主義」への道を歩むであろう。我々は、「党」の問題を一方では「党—軍」としたり他方では「党—大衆」とすることに反対する。我々は、「党」と「軍」と「大衆」の相関関係を問題としていたのではない。すなわち現代世界にとって、党はどのような組織として要請されているのか、これこそ我々の問題点である。これに対しての教訓は明らかにレーニンによって指示されている。▲指導者—党—階級—大衆V。我々が主張する「党—軍」の正しさは、このレーニンの指示全体を軍として捉えた時にのみ効力を発する。「軍は党

から離れて一人歩きしてはならない」、「党は大衆から離れてはならない」。大要尤もな話である。しかし、革命軍は、日和見主義から離れて独自に活動すべきであるし、大衆は日和見主義党を乗り越えて前進するものである。明らかに「左派」の論述は、「その内部に共産主義的原理を実現している党—軍」といった止めどもない組織方針と、そのために生じてくる革命的大衆との結合に対する恐怖によって貫かれていく。この悪循環をただただ「世界党—世界赤軍」なる空想物によって責任逃れしているのである。ここでの我々の主張は、第一に▲党Vは、▲▲共産主義実現Vのための▲▲蜂起の党Vでなければならぬ。第二に、そのような▲▲党Vを建設するためには、「党—軍」や「党—大衆」といった誤った組織思想を排し、▲▲党—軍Vという思想を堅持しなければならぬ。レーニンの組織—ボルシェヴィキは、一貫してこの二つの偉大な任務を放棄しなかったのである。ボルシェヴィキがこのような堅固な組織であってこそ革命は達成されたのであり、大衆は、プロレタリアートは、農民は、反乱兵士はボルシェヴィキを支持したのである。何故、日本階級闘争の中でレーニンのこの組織論が空転するのか？それは、党が大衆の自然発生性に対して目的意識性を獲得するまでに到らず、党自身が、同盟という自然発生的な党に身をまかせているからである。「史的唯物論の新しい段階」というまでもなく、世界情勢は明らかに

新しい段階に入った。しかし、この新しい段階は、現在始まり、新左翼主義の止揚にあるのではなく、ロシアボルシェヴィキ革命軍が全世界に革命の成功と世界革命の確信を与えたその瞬間に依拠しているのである。すなわちロシア革命に始まる現代世界革命の時代における戦略・戦術・党組織こそが、誰もが意識している「新しい段階」の内実なのである。「スターリン主義は一旦世界革命戦争の入口まで到達する事を通して、帝国主義と党の関係が根本的に変化した地点—プロ独樹立で未解決のまま帝国主義に屈服している党であり、従って世界革命戦争を闘う党——軍に対する共同反革命として存在する。」そして、中共とソ連の評価が、カッコつきで後に示されている。「左派」の評価によれば、多分、中共・ソ連は「世界革命戦争を闘う党——軍に対する共同反革命」という事になるのである。これは小ブル以外の何ものでもない。我々の見解によれば、中共・ソ連並びに諸社会主義国軍隊は、世界革命戦略上の味方であるばかりではなく、我々の単一の世界革命戦略の要素ともなっているのである。中共やソ連を抜きにして世界革命戦争があるわけがないし、勝てるわけがない。中共やソ連の偉大な社会主義国があるからこそ、我々は確信をもって世界革命戦略・世界党—世界赤軍・世界革命戦争を語るのである。スターリンは、偉大なソヴィエト社会主義祖国の防衛者であり、今や我々はこのスターリンの

偉業に報いるために全世界革命戦線を構築し、「防衛」↓「対峙」↓「攻勢」へ全革命勢力を結集しようではないか。このような論述が示すように、「左派」は、すでに共産同の革命精神をすべてかなぐり捨てることによって、革共同との提携に狂奔している。

「左派」は、革命軍のスローガン「すべての武器をブルジョア陣営に向けよ」を完全に踏みにじり、実質的には「社会主義国に対して武器を取れ」と叫び散らしているのである。「左派」の軍隊とは、ここに到って手に取るように明らかになった。彼らの軍隊は、帝国主義軍隊によって解体され、社会排外主義・反革命軍隊として改編されるであろう。そのような例は他にいくらかもあるからこそ、一般的な武装軍団の組織化ではなく、徹底した革命軍を建設しなければならぬのである。

このような小ブル意識は、当然の帰結として世界革命戦略を確定し切れないままに、大衆運動主義と精神主義でもって何とか乗り切ろうとする。「過渡期（世界）の党は、開始した共産主義に到る永続的世界革命戦争の遂行をその任務とし、帝国主義と党一軍、共産主義まで続く党一軍、大衆の関係を保有する党でなくてはならず、故に党規、党風、軍規が決定的意味をもつ。」これは従来の共産同の過渡期世界からの一歩後退である。「共産主義まで続く党」であるためには、「党」はどのような「組織でなければならぬか。これこそが本来の問題点ではなかったのか。

本来の問題点を隠蔽して一般的に「共産主義まで続く党」という言葉で誤魔化すところに過渡期世界論からの後退がうかがわれる。

「過渡期世界論」から我々の「ロシア革命以後の現代世界革命の時代」への過程は、「労働者国家内の階級闘争」と「先進国階級闘争」と「後進国階級闘争」の結合を「世界武装プロレタリア陣営」を媒介にして、「社会主義軍隊」と「先進国プロレタリア軍団」と「後進国民族解放戦線」との革命的結合に集約することによってなされたのであり、この世界革命戦略によってのみ「世界党」世界赤軍V世界革命戦争V蜂起の党Vを現実化してきたのである。

一体次のようなことが許されていいものであろうか？しかも、同一人物が「共産主義まで続く党」とか「世界党」世界赤軍」を建設するとか「世界革命戦争に勝利する」とか語るのである。

「マルクスもレーニンも革命の契機―支配の危機を多かれ少なかれ資本主義、帝国主義の運動の中から見出した（マルクス・恐慌、レーニン・帝国主義戦争）。マルクスの時代にあつては、ブルンキー、バクーニンの中にむしろ危機―（支配―国家の危機）の主体的創出への実践（それは非論理的・経済主義的なものであつた）が存在しており、故にマルクスは必ずしも第一インテリの中で実践的に彼らを止揚したわけではない。」御苦勞なことである。黙って軍隊を建設すればよいものを余計なことをしゃべ

りすぎて、軍隊に付録がつくはめになった。「反マルクス・レーニン主義的・日和見主義的軍隊」・これが「左派」の軍隊の名称である。「マルクスもレーニンも革命の契機―支配の危機を」

「多かれ少なかれ」「資本主義の運動の中から見出した」。どうして「多かれ少なかれ」という言葉が出てくるのか？「資本主義・帝国主義の運動の中から」「革命の危機」を「見出す」ことが何故いけないのか？これは正しい方法であり、唯一の科学的な方法である。どうして、これに対して「ブルンキー、バクーニンの中に危機の主体的実践が存在」しているのか？そしてさらには、「ブルンキー、バクーニン」が「非論理的・経済主義的」とわかっ

ていながら何故そのようなことになるのか？これらの言葉の内実は、党をマルクス・レーニン主義からブルジョアイデオロギー、アナキズムに売り渡そうとする陰謀である。このような「左派」は、自身の世界革命戦略の未確定を、マルクス・レーニン主義は不完全であると歪曲することによって、弁護し、曖昧にしているのである。マルクスの「恐慌論」は、資本主義の暴力性とそれ

に對置するプロレタリア階級の暴力を示したものであり、レーニンの「帝国主義論」は、帝国主義の狂暴性を革命の暴力によって打倒するように教えている。マルクス・レーニンは、理論上も実践上も無政府主義を完膚なきまでに粉砕した。これが事実であり、事実は曲げられない。「左派」は、無政府主義に対する最高のお

べっか使ひである。

「左派」が主張する世界革命戦争の第三段階とは次のようなものである。「世界党―チンメルワルド左派を荷うべく世界革命戦争をその出発点とした党一軍の世界的登場とプロレタリア陣営の登場―〇・八来の国際階級闘争の単一化と、世界革命戦争（総反攻―世界プロレタリアの共産主義への急速な移行まで）に向けた各国内戦の開始とこれに対する帝国主義の国際反革命―侵略、スターリン主義の最終的分解、をその第三の段階とするのである。」これは、嘲笑すべき内容であり子供騙しである。「左派」は、「世界革命戦争」の要因に、「各国内戦」と「帝国主義の反革命―侵略」と

「総反攻」の内容にはなっていない。世界革命戦争は、第一に「各国内戦」という一般化ではなく、先進帝国主義内プロレタリアートの武装蜂起への闘いであり、その性質上全人民的・国民的規模における闘いとなり、その国際的的革命活動は必至となり、国際革命軍の一部隊ないしは中心部隊として「先進国プロレタリア軍団V」は形成されねばならない。第二に、「後進国反革命―侵略」に裏打ちされた独自の「後進国解放戦線V」の前進であり第三に「スターリン主義の最終的分解」といった小ブル意識を排して、「社会主義諸国V」の「統一V」と「団結V」は必至であり、「社会主義軍隊V」は「世界党」世界赤軍Vの最も安定し

た部隊とならなければならない。すなわち、 \wedge 世界革命戦争 \vee は、 \wedge 先進国プロレタリア軍団 \vee と \wedge 後進国民族解放戦線 \vee と \wedge 社会主義軍隊 \vee とによる世界革命戦線の構築と陣型とによってのみ現実のものとなるのである。それは、明らかに \wedge 世界党 \vee 世界赤軍 \vee の内実であり、全世界プロ独に向けての権力奪取の一大軍団でなければならない。

共産主義者同盟神奈川県委員会「左派」グループは、世界革命戦略上「革共同」と何ら変わるところなく、組織上「革マル派」と同様の小ブル主義であり、言葉の上だけの「世界党 \vee 世界赤軍」の承認を唯一の逃道としている。「左派」の論文の第一部は、ぼろぼろになった過渡期世界論であり、第二部は、軍事のマンガ化である。なんといっても、党派論争には無駄なことが多すぎることだろう。我々は、「左派」の小ブル的無駄話に対して小ブル的対応はしない。ただ我々に言えることは、将来革命戦争の最中にはそのような無駄話は一切必要でなくなるだろう、ということのみである。

「叛旗」派は いかに革命を裏切っているか？

きつつ、階級の存在様式から組織構造を定め、旧来の党 \vee 活家集団 \vee 大衆組織に対して、党 \vee 軍 \vee 統一戦線を組織戦略として確定する事に他ならない。」と言って、今や新左翼の慢性病とさえなっている。「党 \vee 軍 \vee 統一戦線」なるものを純哲学思想集団に変質せしめようと企図しているのである。ここにおいても「党の革命」は、共産同独自のアナキズム・解党主義・改良主義の開花として存在している。

「叛旗4号」には、神津陽による「党内論争に対する私たちの態度」という上品ぶった論文が掲載されている。この人、神津陽は、新左翼主義の入門 \vee この門を通り貫けなければ左翼にはなれないという門 \vee 黒田寛一、宇野弘蔵、岩田弘、武谷三男等々のブルジョア合法マルクス主義者の崇拜者の一人である。この論文において彼は、裏切り者田原芳の「現代革命の条件と社会主義」や神奈川県委員会の「左派」などを引きあいに出して批判しているつもりであるが、これら出版文の実際上の相違点は、どれが早く出版されたかというだけのことであり、本質的によどの論文も同じこと「党の革命」という御守りに陶酔しているだけのことである。

他派が「党の革命」を子供のような無邪気さで弄んでいるのには比較して、「叛旗」の「何故、党の革命なのか」という問いかけは、「党の革命」という冗談事に、さも真剣に取り組んでいるかのような恰好をしてみせるあたり、芸者としては一步前進ながら

共産主義者同盟三多摩地区委員会「叛旗」派グループが「いかに革命を裏切っているか？」。これを明らかにすることが我々の任務であり、同時にこのようなくだらぬインテリゲンツァグループを抱え込んで来た共産主義者同盟に愛想を尽かすことも課題の一つとなる。

一体「叛旗」派の「党の革命」とはどのようなものか。「『党の革命』を押し進める軸は、実に綱領 \vee 戦略基底から党組織構造を階級の存在様式との関連で明らかにすることに掛かっている。つまり『党の革命』とは現在開始されたかにみえる自己総括や、基準なきスターリン型左派、右派論にもとづく魔女狩りなどが目的ではなく、実に綱領 \vee 戦略基底から党組織構造を階級の存在様式との関連で明らかにすること」である。これらの意味していることは、第一に党の組織 \vee 戦略 \vee 綱領をおおむね哲學的実在・実存論に譲り渡すことであり、第二にそのような哲學的思想的生活綱領を「革命のかくめい」 \vee すなわち、中立から反革命 \vee に追いやることである。そして次には、「『革命のかくめい』との関連で、『党の革命』を明らかにする」ということは、私たちに言わせしめれば綱領の基底を(社会的)階級形成論にお

党派としては一步後退である。大変もの解かりの悪い赤児、それが「叛旗」派である。

「もの解かりの悪い赤児」の正体は、「居直り」以外の何もでもない。「『党の革命』を問題にするには、その規準として措定した『党 \vee 軍 \vee 統一戦線』の質、構成、歴史的位置を説明せねばならない。そのためには、まず『綱領 \vee 戦略と党派の関わり』が明らかにされ、次いで、過渡期社会・社会主義 \vee 共産主義に於ける階級の存在様式として、党 \vee 軍 \vee 統一戦線の生成と死滅の過程が、国家、ソヴェトと同様、検討されねばならない。」ここで何が「検討されねばならない」のか？まず、「綱領 \vee 戦略と党派の関わり」であり、そして「階級の存在様式」であり、「党 \vee 軍 \vee 統一戦線の生成と死滅の過程」がそれであると彼らは言う。何故、このようなことが問題となり、このようなことが「党の革命」と崇められているのか。何んのことではない。「叛旗」は、

「『党の革命』という言葉の裏に『革命党の不用』という『解党主義・アナキズム』を忍び込ませているだけのことである。我々は、 \wedge 革命党を建設しなければならぬ \vee と云っているのではありません。「叛旗」は「党の生成と死滅を検討しなければならない」と言っているのである。我々が \wedge ブルジョア \vee を打倒し、プロレタリア社会主義権力を打ち建てよう \vee と主張しているのに対して、「叛旗」は「過渡期社会・社会主義 \vee 共産主義に於ける階

級の存在様式、云々」と問題を誤魔化している。そしてまた、我々が「世界史の革命総路線としての戦略を確定しなければならぬ」と主張するのに対して、「叛旗」は「綱領」戦略と党派の関わり」といった全くバカげた狂言を吐いているのである。たとえば「医者と注射器との関係」「料理人と庖丁の哲学的諸関係」このようなことをわざわざ「叛旗」は説明しなければならぬと言ふ。そして、カント主義まがいの、時間とか空間とか、自然史、歴史、世界とか、文明史、人類史の視野の「政治」とかいう言葉によって現実的な党の任務や党の方針を一切誤魔化しているのである。問題は敵としてこうである。空間や時間や自然史、歴史、世界や文明史、人類史において、歴然たる事実としてブルジョア階級とプロレタリアートの二大階級が世界階級攻防戦を繰り返しているのである。明らかに「叛旗」派の論述は、全て「弁証法」の放棄によって結論づけられている。「政治党派が社会主義や共産主義を想定する時、自らが、時間、空間を最大限拡大、洞察し、自己の位置を措定すること、綱領による普遍性への接近と、自己が何を媒介にしてそのような普遍性へ接近しうるかという戦略内容の確定が問われるのだ。」これは、完全に「綱領」を哲学的空文句に置きかえようとする企てであり、敵の廻し者、革命軍統後の小ブル反乱以外の何ものでもない。「叛旗」の意味がはつきりとしてきた。又彼らの言う「革命のかくめい」なるものが何で

なければならないのであり、それ以外に、特殊な組織や最高の権威や暴力実体を意味づけようとするとき、 Δ 党軍 ∇ という正しい革命党組織に対して、「叛旗」のように「生活」にその活路を求めようとする日和見主義が生じてくるのである。また別の例として関西地方委員会の「綱領委員会」や赤軍派の「蜂起統一戦線」といった邪道の如きもそうである。だから、軍事の重要性は、 Δ 軍を組織する党の実体 ∇ にあるのであり、共同生活や文化水準の上昇、社会的階級成熟の質にあるのではなく、それらの上に位置するのである。すなわち、階級成熟それ自体のうちにはなく、ブルジョア階級とプロレタリアートの各々の側におけると同時に、一般的な階級成熟の質に左右されることなく、一方ではその階級分裂をなんとか守り抜こうとし、他方ではそれを止揚しようとして存在するのである。一方は反革命軍として、他方は革命軍として。その意味で、我々の軍事における重要性とは、第一にプロレタリア階級独自の特殊な組織であり、第二にプロレタリア階級の威風であり、第三にプロレタリア階級のブルジョア階級を打倒する暴力実体でなければならない。「 Δ プロ独樹立、過渡期社会、社会主義、共産主義」の総過程の本質は、擬制的労賃制、労働証書制、量に応じた分配を基軸にした擬国家政策、又は、それへの党の政策として考察されるのではなく、それらを一部分として包摂しながら、階級が、社会的に成熟して行く過程、俗に言

あるかも知った。それは、「革命に対する叛旗」であり、「叛旗」以外の何ものでもない。綱領とは、断固として、完全に敵を打倒するための規準的武器である。

次に、彼らの哲学的空文句綱領のマンガ性をとくと御覧願おう。「政治党派にとっての『軍事』の位置の重要性の確認は、それ故、『軍を組織する党の意識性』にあるのではなく、共同生活や文化水準の上昇を（社会的）階級成熟の質として了解しようという、綱領レベルに於ける、党、階級の価値転倒を前提とするのである。『軍事は、政治にとって技術である』という事の対極にあるのは、党の実体、軍という折衷主義ではなくて、『軍事は、本質に於いて生活の延長である』という単純な事柄であるが、このこと了解のためには、過渡期社会、社会主義、共産主義に於ける、全人民の武装の完成、生活へ軍事がとりこまれる過程における『階級』の存在様式の把握と、現代過渡期世界に於ける党の位置確定が、前提であり、その上になつてのみ、革マル主義や、青解主義や、主体的唯物論、総じて、疎外革命論党派とたもとをわかち、世界史、世界赤軍の任務を確定しようのである。『こんなことが『世界史、世界赤軍』なら苦勞はない。マンガならもっと面白く描いてほしいものだ。しかしながら、軍事は、『本質に於いて生活の延長』ではない。軍事とは、特殊な組織であり、最高の権威であり、暴力実体である。それ故に、党は軍事を身につけていな

えば、政治や武装の政治過程への取り込みと、個的、 Δ 共同体的所有、意識、人間の完成過程としてのみ把握しようとしたのである。』著者がここで問題としていたのは何であったのか。「綱領」戦略の基底は何か」ではなかったのか。それにもかかわらず、「共産主義への総過程の本質」なるものが何故登場しうるのか。これは明らかに党の目的を曖昧にし、綱領を過程全体の哲学的一元化に置き換えようとする企てである。もちろん「労賃制、労働証書制、量に応じた分配を基軸にした国家政策」という現代社会主義国家政策は、正しいものであるし、より発展した形態を追求すべきである。しかしながら、綱領を「階級が社会的に成熟していく過程」や「個的、 Δ 共同体的所有、意識、人間の完成過程」としてのみ把握しようとする見解は、 Δ 目的としての綱領 ∇ 、 Δ 戦略としての綱領 ∇ にはなはだしく敵対しているのである。それは、次の論述を見れば、なるほどと頷けるであろう。「階級形成論が綱領の基軸であるとは、以上の意（すなわち、階級の社会的成熟の過程と個的、 Δ 共同体的所有、意識、人間の完成過程）においてであり、そこでいう階級とは、『社会的階級』（誤解を恐れずに言うなら、共産主義的人間の団結、人間の解放への主体とおきかえてもよい。）なのである。政治革命に到るレーニン型の（『なにをなすべきか』など）宣伝、煽動戦略の持ち込み、いわば『政治的階級』（党、活動家集団、大衆組織）とは、時間性の抽象の

中と歴史的質が異なるのである。このことを了解しないと階級形成を狭く、『政治的』階級形成へ一面化する（共産同『労働運動パンフ』など）理解、誰も頼みもしないのに引き上げるべきだという主張が生じるのである。「これは、共産同の小ブル性に対する右翼的対応であり、革共同一派とどこがどう違うのか。この論述からするならば、「共産同」は、レーニン主義の原則を守った素晴らしい党のように思えてくる。しかし、実際は逆である。共産同に対する批判点は、共産同の政治革命に到る宣伝・宣導・戦略の不徹底、そしてそこから生じてくるプロレタリア階級の階級意識と政治意識の促進の不徹底、要するにレーニン主義の不徹底および反レーニン主義においてのみ成立するのである。「叛旗」の「共産同」に対する批判は当たっていないし、それどころか右翼的な対応である。「共産主義的人間の団結」または「プロレタリア人間」は、現代世界革命の時代における国際二重権力状況における世界共産党的立場、または国際コミューン・ソヴィエト、人民共和国派としての団結形態としては存在する。たとえば、共産主義者は、共産主義的人間、プロレタリア的人間、社会主義的人間として語ることもできる。しかし、革共同革マル派やこの「叛旗」派を筆頭とする新左翼主義―国際改良分裂主義者による「共産主義的人間」とか「プロレタリア的人間」とは、共産主義者やプロレタリア階級の世界的団結形態としてあるのではなく、レー

ニンとマルクスの分離や後期マルクスと初期マルクスの分離によつて歪曲されつつ、国際共産主義運動の分裂主義として、改良主義としてあるのである。それ故、新左翼主義の「共産主義的人間」や「プロレタリア的人間」は、世界共産党的団結の阻害物であると同時に、 \wedge 武装蜂起の、目的としての党 \vee の敵対者となる。新左翼主義集団は、公然たる戦争と革命の時期には、小ブル平和主義と \wedge ユーニズムに転落し、その解体において、民族排外主義として変態していくであろう。我々には、階級形成論とか共産主義的人間論とか、プロレタリア人間論とかいったものはない。但し、我々は党の任務として、プロレタリアートの階級意識を助長し、プロレタリアートを一流の共産主義者に養成し、世界プロレタリアートの団結形態を世界党 \parallel 世界赤軍において結実せしめなければならない。

すなわち、「叛旗」派の民族主義的墮落は、次のような論述において決定的である。「私たちが、『党一軍一統一戦線』から『党一軍一ソヴィエト』へと言う時、プロ独期から社会主義社会に致る『社会的階級』の形成過程に於ける、階級の存在様式、構造として理解しているのである。」これこそ、新たな装いによるベルンシュタイン主義 \parallel 実存主義 \parallel 構造主義以外の何ものでもない。ソヴィエトは、今や世界ソヴィエトとしてしか存在しえず、蜂起の機関として、すなわち世界同時革命を担う蜂起の機関とし

てしか存在しない。そのような意味で我々もソヴィエト運動主義者である。しかし「叛旗」における「ソヴィエト」とは、世界革命へ向けた蜂起の世界的機関としてあるのではなく、観念論的共同体として、党に代わるサンディカリズムとして意味づけられている。「叛旗」は、世界ソヴィエト派・世界プロ独派に対する叛旗であり、世界同時革命に対する叛旗であり、反革命の旗である。我が \wedge 赤軍旗 \vee は、必ずや小ブル反乱主義に勝利するであろう。

「叛旗」の反革命性と我が \wedge 赤軍旗 \vee の勝利は、次の彼らの論述において明らかである。「私たちは、世界プロ独を創出する主体的構造が、党一軍一統一戦線であり、世界プロ独から社会主義を担う、階級の存在様式が、死滅しつつある党一軍一ソヴィエトであり、社会主義から共産主義にかけて社会的階級の成熟（階級の完全な止揚）に致ると考えている」これは、言葉の上だけの世界プロ独であり、実質上の世界プロ独の否定である。要するに「党一軍一統一戦線」の民族版であり、「死滅しつつある党一軍一ソヴィエト」が、現実には、ソ連軍・人民解放軍解体に結び着かざるをえず、後進国民族解放戦線に対する全くの無内容・無方針であるがゆえに、「階級の完全な止揚」といった逃げ口上に終始するのである。現実の世界プロ独、世界ソヴィエトは、 \wedge 社会主義軍隊 \vee 先進国プロレタリア軍団 \vee 後進国民族解放戦線 \vee の連系によってのみ可能なのである。「叛旗」の世界プロ独は、

反「社会主義軍隊」と「哲学的プロレタリア軍団」と「後進国階級止揚」による観念論であり、逆さの論理であり、民族主義である。すなわち小ブル国際改良主義による現代世界局面打破の焦り以外の何ものでもない。

言葉の上だけの「世界プロ独」の正体は、すでに明らかにされたが、次の彼らの文章で決定的である。「私たちは、むしろ、権力奪取 \parallel 政治革命には、ウクライドの差にもより、様々の過程、形態が想定しうる事を前提にした上で、過渡的一国権力奪取が何を媒介として、世界プロ独へ至りうるかを、綱領 \parallel 戦略の了解の質として問うべきなのだ。」何としてもはがゆいことだ。「何を媒介として、世界プロ独へ到りうる」か。唯一我々、世界プロ独派・世界ソヴィエト派・ \wedge 世界党 \parallel 世界赤軍 \vee 派の闘いによってのみ可能である。こんなことは、いちいち「綱領 \parallel 戦略の了解の質として問う」べきことではなく、我々、小心の持ち主としては、わざわざ \wedge 綱領 \vee に記載されるべきではないと断言する。しかしながら、我々の運動をして人民が世界プロ独派と呼ぶに際しては何のわだかまりもない。何が何でも、我々は、「叛旗」派のように「何を媒介として、世界プロ独へ至るか」という問題を解決せずして「世界プロ独」を語るようなことは絶対にしてはならない。「叛旗」は、「蒼氓に対する叛旗」「裏切りの叛旗」である。「戦旗派」（裏切り者田原芳）と「左派」（神奈川県委員会）

いのである。我々は、一切ブルジョアジーの反社会主義宣伝に耳を貸してはならないし、小ブルの妄想に陥ってはならない。我々の気風は、勇敢と沈着と正確と敏速である。マルクス・レーニン主義の科学性を断固として守り抜き、我が赤軍旗にくっきりと革命的レーニン主義の印を刻すであらう。

「キム」の名に恥じる 国際改良分裂主義

奇妙な論文がまた一冊出た。「共産主義青年同盟理論機関誌」戦士復刊七号」がそれである。発行元は、一九七〇年五月五日付け「共産主義青年同盟関西地方委員会」となっている。大悲哀れを誘う姿ではないか。「党」の「青年同盟化」。これは、共産同にしか出来ない芸当であり、先は見えすいている。詳しくは、このグループは共産同戦旗派と称し、関西では裏切り者田原芳によって指導されている。内容上は、社会学同何ら変わりばえしない小ブル戦略であり、革共同やそこいらの新左翼諸派の紋切り型である。

新左翼諸潮流はすべて次のような定式でもって軍事問題をあい

るものの改良主義と分裂主義と局地主義と小ブル性と我々の
Aロシア革命以降の現代世界革命の時代Vという世界歴史観の
正しさをまざまざと見せつけている。我々は、この論述の内容から、あの忌まわしき革共同の「ヤルタ体制粉砕・スターリン主義粉砕」反帝・反スタ世界革命戦略」との同一性を引き出さざるをえない。どうして今さら、こんな改良主義的情勢分析が必要なのか。この内容こそ日本階級闘争史上小ブル運動主義として登場して来た真の姿である。「戦旗派」の論述に従うと、「帝国主義列強の国際反革命同盟」と「スターリン主義」人民戦線派の反革命的屈服」の体制がヤルタ体制であるということになる。そして、NATOや安保やワルシャワ条約機構が並列的に並べられたにすぎない。これは、明らかに国際共産主義運動の無理解と混乱以外の何ものでもない。これは、「戦旗派」過渡期世界論の地方性と非歴史性であり、ロシア革命以降の壮大な世界革命闘争に対する無知の表現である。「戦旗派」は、その非歴史性により、大きな局面を把握しえず、小さな局面にのみ窮々としているのである。もしも彼らに現代世界における「社会主義と帝国主義の決定的な分裂」がわかっていたら、ヤルタ体制についての小ブル危機感から解放されていたであらう。しかし、「戦旗派」は、革共同と同様に底なしの小ブル世界革命戦略「国際改良主義へと転落していくのである。「ソ連国社会主義路線は、コモコンワルシャ

まいにしている。「党」統一戦線」。これは、何んら軍事問題を解決したことにはならない。本来、軍事問題とはどのように提起されていたか。それは、党をどのような組織に改編しなければならぬか、という問題において提起されたのであった。にもかかわらず、「戦旗派」並びに新左翼諸潮流は、この問題を「党」統一戦線」として指導の通達一般によって誤魔化していったのである。軍事問題は、明らかに新たな党の指導性や一般的武装闘争を要求しているのではない。このことに無自覚な「戦旗派」は、一方では世界革命戦略上の誤り「革共同の「反帝・反スタ」への傾斜」を犯し、他方では、「恒常的武装闘争の推進」とか言って自らを後退防衛局面に追いやることによって、軍事の問題すなわちA降起の党Vを完全に後方へ投げ捨てているのである。

「過渡期世界の矛盾の構造化としての戦後ヤルタ体制は、三〇年代を通じての国際市場分割戦↓帝国主義間戦争における米帝の勝利と、ソ連「コミンテルンのそれへの屈服によって、米ソ平和共存「国連体制」IMF、GATT、NATO、安保「ワルシャワ条約機構」SEV（コモコン）として現象し、東欧革命、帝国主義国家の戦後革命、とりわけ中国革命を中心とする後進国革命として表現された世界階級闘争の昂揚に対する、帝国主義列強の国際反革命同盟と、スターリン主義「人民戦線派の反革命的屈服の体制であった。」この論述は、共産同の「過渡期世界論」な

ワ条約機構を通じての東欧圏からの収奪の強化としてまず表現され、これに対する東欧圏の分解は、チェコ事件として結集した」として、経済主義的・改良主義的把握をなし、社会主義国内の小ブル反乱を賛美し、プロレタリア独裁を裏切り、反社会主義的立場を暴露した。ブルジョアジーによる武装反乱こそが侵略・反革命なのであり、「平和共存」や「世界市場の形成」等は、社会主義国家の積極的な戦略として存在するのである。A社会主義と帝国主義の分裂VとA平均等発展Vの原則さえ理解されていたら、このような改良主義に陥いらなかったであらう。「ワルシャワ条約機構」の制圧下において、東欧「労働者国家」群を総体として、ソ連に屈服させた上で西独・日帝からの資本輸出受け入れ、米ソ体制の維持をはかっているのが、ソ連の現在の路である。又、後進国に対しても、まず、「ソ連労働者国家」の利害を優先する以上、その「経済援助」「軍事援助」は後進国人民からの収奪であり、当然にも、親米派「反米親他帝国主義派」ブルジョアジーとの結合によって、米帝との「勢力圏」争いのバランスを維持することに比重が移行している。「これは、ソ連を世界革命戦争の一部隊「赤軍」として登場せしめようとする積極的な立場もなく、ソ連が世界革命戦線へと発展する必然性を明らかにしたものでなく、現代世界革命の障害物として登場しているのである。要するに、「ソ連社会主義国家」を「ソ連労働者国家」とす

る彼らのサンデイカリズムの把握にもその一因はあるとしても、「中共」に対する逆行行為は絶対に許されるべきものではなく、「戦旗派」自身が、社会排外主義・国際改良分裂主義として粉砕されなければならない。このことからして、「戦旗派」の「世界党」世界赤軍「世界反帝統一戦線」は、世界ボルシェヴィキを組織することなく、「革命の第〇の道」として消滅していくであろう。これらの諸結果は、すべて「戦旗派」の最近の経済主義への転化によってより促進されるであろう。

「我々がかつて世界的反帝第三潮流として主張してきた問題は、世界革命戦争「世界プロ独」世界社会主義「世界共産主義を指す、世界党「世界赤軍」世界反帝統一戦線の形成として具体化されねばならず、現代帝国主義の新たな侵略・反革命と闘い、国際反革命同盟「NATO・安保を粉砕することを当面、主軸におきながら、スターリン主義「人民戦線派」と徹底的な党派闘争を遂行し、ワルシャワ条約機構軍の解体をはかることによって、中国派の分解を促進していかなばならないのである。」これが、共産同盟「戦旗派」の犯罪行為「反革命」裏切り者の正体である。口先では「世界プロレタリア独裁」や「世界共産党」等々と語りながら、明らかに反社会主義的正体を暴露している。我々は常に世界革命戦略を、 \wedge 社会主義軍隊 \vee と \wedge 先進国プロレタリア軍団 \vee と \wedge 後進国民族解放戦線 \vee の革命的結合によって保障しつつ、そ

民戦線」を同一のものとして取り扱っているようだ。しかし、そこには大きな相違点が存在している。我々は中国共産党の高度に組織された遊撃戦から総反攻としての人民蜂起を \wedge 人民戦争 \vee と呼ぶし、明らかにこれは \wedge 人民戦線 \vee として通用するのであり、正しいものである。またソ連の「人民戦線」は、プロ独を基軸に、また「世界共産党会議」を媒介にして「戦線上の問題」として提出されているのであり、これに対する小ブル的反撥は不必要である。しかし、日本共産党の場合には、武装闘争を放棄し、国際分裂活動を策し、プロレタリア独裁を裏切り、プロレタリア社会主義革命を放棄している以上、「帝国主義的人民戦線派」として粉砕する必要がある。すなわち、プロレタリア独裁政権を基軸とする \wedge 人民戦争「人民戦線」 \vee は、可能であるし、正しいことである。我々が提起している世界革命戦線「世界ボルシェヴィキ」世界プロレタリア独裁も言ってみれば \wedge 人民戦線 \vee であり、 \wedge 人民戦争 \vee でなくてはならない。しかし、日本共産党の「民族的・帝国主義的人民戦線」小ブル連合政権」は、打倒されなければならない。そして、このことは、当然ヨーロッパ戦線においても見られることであり、ソ連主権の世界共産党会議において分裂策動を繰り返している仏共産党・伊共産党等々の社会帝国主義は、当然にも粉砕されねばならないであろう。ソ連共産党と中国共産党は、共同して、共同の敵「帝国主義を打倒しなければなら

の結末点を \wedge 世界党「世界赤軍」 \vee において意志一致してきた。にもかかわらず「戦旗派」は、「NATO・安保」粉砕と同時に「ワルシャワ条約機構を解体し、中国派を分解」させる、と言っている。これは、完全なる局地戦略主義であり、改良主義であり、世界革命戦略上の反革命分子である。もし中共やソ連なしに世界革命戦争ができるなら、やってみるがよい。もしブルジョアジーに利用されずしてワルシャワ条約機構が出来るものなら、やってみるがよい。もし世界革命戦線を分裂させずして中国派を分解させることが出来るものなら、さしてみるがよい。もし、ワルシャワ条約機構を解体し、中国派を分解させて、「NATO・安保」革命戦略上、 \wedge ワルシャワ条約機構軍の一層の強化 \vee と \wedge 中国派のさらなる統一と団結と前進 \vee を願うものである。一切の小ブル性を排し、世界革命戦線の陣型を獲得しなければならぬ。明らかに、次のことは予見できるであろう。革共同の「反帝・反スタ疎外世界革命論」は、革命の現実の中に右翼として落ち着くであろうし、共産同盟の「反帝・反スタ政治世界革命論」は、世界革命戦争の現実の中にカウツキー主義として転落していくであろう。

そして「人民戦線派」ということに対して少々の注意がいるように思われる。「戦旗」では、ソ連の「人民戦線」と日共の「人民戦線」を同一のものとして取り扱っている。我々は中国共産党の高度に組織された遊撃戦から総反攻としての人民蜂起を \wedge 人民戦争 \vee と呼ぶし、明らかにこれは \wedge 人民戦線 \vee として通用するのであり、正しいものである。またソ連の「人民戦線」は、プロ独を基軸に、また「世界共産党会議」を媒介にして「戦線上の問題」として提出されているのであり、これに対する小ブル的反撥は不必要である。しかし、日本共産党の場合には、武装闘争を放棄し、国際分裂活動を策し、プロレタリア独裁を裏切り、プロレタリア社会主義革命を放棄している以上、「帝国主義的人民戦線派」として粉砕する必要がある。すなわち、プロレタリア独裁政権を基軸とする \wedge 人民戦争「人民戦線」 \vee は、可能であるし、正しいことである。我々が提起している世界革命戦線「世界ボルシェヴィキ」世界プロレタリア独裁も言ってみれば \wedge 人民戦線 \vee であり、 \wedge 人民戦争 \vee でなくてはならない。しかし、日本共産党の「民族的・帝国主義的人民戦線」小ブル連合政権」は、打倒されなければならない。そして、このことは、当然ヨーロッパ戦線においても見られることであり、ソ連主権の世界共産党会議において分裂策動を繰り返している仏共産党・伊共産党等々の社会帝国主義は、当然にも粉砕されねばならないであろう。ソ連共産党と中国共産党は、共同して、共同の敵「帝国主義を打倒しなければなら

ない。ソ連共産党は公然と国内粛清と「世界共産党会議」における「反党」反世界党分子「仏共産党・伊共産党等々」を粉砕し、ワルシャワ条約機構軍を増強しなくてはならない。中国共産党は、国内粛清を強化し、後進国民族解放戦線の革命戦線の保障を続行し、社会帝国主義「日本共産党・仏共産党・伊共産党等々」を粉砕し、人民解放軍の増強を押し進めなければならない。ソ連共産党と中国共産党と我が党は、兄弟党であり、 \wedge 世界党「世界赤軍」建設に向けた共同製作者となるであろう。

「共産主義青年同盟西地方委員会」は、「キム」の名に値しない国際改良分裂主義であり、言葉上だけの「世界党「世界赤軍」」でのみ延命している。実質的に「戦旗派」は、「革共同」と何んら相違点を持っていない。我々は、このような小ブル新左翼主義を清算し、 \wedge 世界ボルシェヴィキ党 \vee のもとに革命の暴力の蓄積を継続する。「世界党「世界赤軍」」の建設は、絶対に「戦旗派」には不可能である。「キム」はレーニン主義であり、「共産主義青年同盟西地方委員会」はカウツキー主義である。帝国主義は、明らかに新左翼主義集団を全て呑み込んで、自らの軍隊に仕上げていくであろう。そして、この帝国主義を呑み込むのが、 \wedge 世界党「世界赤軍」 \vee であることは明らかである。それ故にこそ、「世界党「世界赤軍建設」」に関する「戦旗派」と我が \wedge 赤軍党 \vee の相違点を明白しておく必要がある。

おあつらえ向きに「戦士七号」は、「共産主義同盟関西地方委員会」の名でもって「世界党」世界赤軍建設の爲の我々の闘い」という論文を掲載している。何もこんな擦れっ枯らしの青年を出さずに、もっと純情な青年を出せば新鮮味もあるというものを。「共産主義者同盟結党以来一二年の全過程は、將に世界革命の党建設の苦闘の歴史だった。そして、この全面的分派闘争の中で、分派闘争こそは党をもっと強く鍛える『党の革命』の最良の手段たる事を、彼ら無政府主義者、解党主義者に対して実例をもって教えてやるうではないか。」それでは、御教授願おうではないか……

御教授ありがとうございます。しかし、諸君の仕方は、ブルジョア教授と一寸の狂いもない正確さによる帝国主義美化論によって導かれていく。諸君及び一向の言うレーニン「帝国主義論」の現実形態論的適用とは、明らかに帝国主義の行動様式であり、「世界一國同時革命」とは帝国主義者の主観的願望である。こんなところから戦略・戦術を引き出してくるならば、諸君自身の論述すなわち「現代過渡期世界は、帝国主義の終末であるにも関わらず、帝国主義はそれ自体で消滅しないが故に、過渡期世界の危機は、この過渡期世界における新たな革命主体の登場によってしか訪れない」という多分にも循環論法くさい文章においてさえ矛盾するではないか。諸君の論拠は全て誤りである。さて今度は、

「明らかにロシア革命以降の『プロレタリア独裁国家群』の成立こそは、全世界のプロレタリア階級に対し、ソヴィエト・ロシアが裏切り続け『全世界労働者の祖国』たる位置と資格とを喪失していく過程であり、否定的現実としてあったのだ。旧同盟においても労働者国家の把握は、世界革命の根拠地ではなく、むしろ極端であるとする見解であり、我々もまた、この点を継承していかねばならない。」「市民社会の内部分裂の二つの表現としての資本主義民族国家と社会主義民族国家という二つの民族国家への分裂の結果なのであり、この分裂は、現代世界史の二大階級が階級として自らを表現するのではなく、民族国家として自らを疎外した結果なのである。」「我々は『一七年以降、過渡期世界に突入し』『世界プロレタリアートの団結の外化としてのプロ独国家の成立』↓『攻撃型階級闘争の可能的条件の成熟』という把握では、決して革命の条件を解き明かす事はできないと考える。つまり革命の世界的敗北の中で孤立的に生じた一國における革命の勝利は、世界革命を前進させる事につながらず、むしろ逆に、日和見主義の根拠地へと転落していったのである。」「この疎外された労働者国家を、革命論上、如何に位置付け、『反スタ』なる概念を戦略論の上に定立するべきか否かの問題が生じてくる。そしてこの資本主義とは異質な非資本主義国家を、その内部に孕んだ現代過渡期世界全体の把握と、その止揚・克服すべき『世界一國

我々が教授しよう。「現代過渡期世界の把握について、一九一七年の『ロシア革命の成功とソヴィエトの成立は、それが歪められているにしても、世界プロレタリアートの自然発生的な団結の外化した形態なのであり、プロレタリアートの世界性と団結を促進する』のであり、国際プロレタリアートとして団結し登場する条件が成熟しているという見解がある。この見解は、ロシア革命↓プロ独国家の成立を世界革命の根拠地国家化↓攻撃型階級闘争の条件の成熟というかつての『二向論文』や『坂論文』に代表される今は『赤軍派』に逃亡した同志の見解であるが、労働者国家への誤った把握と攻撃型階級闘争への楽天的評価を生み出しているのである。」こう著者は語る。確かに「一向論文」や「坂論文」は誤っている。しかしそれは、「労働者国家への誤った把握」や「攻撃型階級闘争への楽天的評価」にあるのではなく、社会主義革命と革命党に対する無自覚性と攻撃型階級闘争に対する不徹底さにおいて総括されねばならない。すなわち、一九一七年ロシア革命とソヴィエトの成立は、一切歪められたものではなく、党の目的意識性であり、世界プロレタリア独裁を促進し、現代世界革命の時代の突破口となったのである。「共産同赤軍派」に対する批判点は、「党軍」と「攻撃型階級闘争」現代世界革命戦略・戦術」における不徹底である。それにもかかわらず、著者は、次のような排外主義へと転落していく。

同時革命」が導きだされねばならない。」

現代世界革命にとって何が極端であるかと言えば、それは、明らかにこの著者や革共同等々の反社会主義ほど極端はないであろう。どうしてロシア革命以後の「プロ独国家群」が否定的現実なのか。いやそれどころか、「包囲の正規軍」を建設せよと言ったのは誰であったのか。「攻撃型階級闘争」を提出したのは誰であったのか。ここにおいて著者は完全な論理矛盾に陥っている。

「包囲の正規軍」という全世界革命戦線の建設を進めなければならぬにもかかわらず、著者によれば、ロシア革命以後の「プロ独国家群」は否定的現実であり階級闘争の極端になっているという。そうすればどのような革命が問題の解決となるのか。著者はここで一足飛びに「世界一國同時革命」というものを想定している。では、「世界一國同時革命」とは一体何か。著者によれば、第一に帝国主義の同時打倒であり、第二にプロ独の内容である。

「帝国主義の同時打倒」、これは正しい。しかし著者は、この「帝国主義の同時打倒」に8行足らず書きそえて、「プロ独の内容」(日和見主義的内容)に2ページを費やしている。これは、そもそも逆である。「世界一國同時革命」は小ブル観念論であり、帝国主義者の主観的願望であり、反社会主義であり、現代プーリン主義・現代カウツキー主義である。すなわち、著者の論述では、「世界革命戦争」世界同時革命は、一般に資本主義の危機の

世界性・世界的同時性に規定されているということだけでなく、又、今日の階級闘争の世界的同時性・同質性に基づくという事だけでは不十分なのである。それは世界プロ独の樹立から世界一國が同時に世界社会主義へ突入していくという意味において不可避な、そして世界社会主義から共産主義の建設の基本路線を実現するために不可欠な戦略なのである。」ということになる。しかし、問題はすべて逆である。我々の見解によれば、党による世界革命戦争一軍一世界革命戦線の構築は、一般に資本主義の危機の世界性・世界的同時性と階級闘争の世界的同質性・同時性に基づきつつも、他方では、「社会主義国家」「帝国主義国家」「後進国」という現代世界の不均等性に基因しているものであり、世界革命党への目的意識性とは、現代世界の必然的な不均等状態に対する現実的な世界単一革命戦線の構築なのである。明らかに著者の「プロ独」論は小ブル独特の展望なき足掻きである。これこそ、桎梏であり、否定的現実である。著者は、「プロ独」の経済主義者、改良主義者であり、世界革命戦線に向けた一統一と団結の敵である。この著者こそ、「正規の包囲軍」を民族的・一國的に歪曲した張本人であり、このように一方では「世界党」や「世界赤軍」「世界革命戦争」とかいって大言壮語を吐きながら、他方世界プロレタリア人民の団結に恐怖し、敵を撃つ、という本分を忘れ、「味方」を何んとか改良すればよい、という国際改良分

裂主義である。戦争とは、 \wedge 敵 \vee と \wedge 味方 \vee の攻防であり、瞬時といえども小ブルの迷想に陥ることは許されないのである。「世界一國同時革命」は、革共同の「反帝・反スタ」と一寸違わぬ戦略であり、歴史上の革命闘争を無視した清算主義であり民族主義である。明らかに著者の考えは、帝国主義の不均等性を反映した小ブルの反撥であり、民族ボルシェヴィキの立場を言葉の上だけの「世界性」でもって隠蔽している。我々の立脚点は、明らかに \wedge 世界ボルシェヴィキ \vee 世界多数派 \vee 世界プロ独 \vee であり、 \wedge 世界ソウィエト \vee ・コミューン派 \vee であり、そのような意味においてのみ世界革命戦線は構築されるのである。そのような意味においてのみ、我々もソウィエト運動主義者であり、 \wedge 正規の包囲軍 \vee の組織者である。著者は、口先では「レーニンを止揚しなければならぬ」と言いながら、偉大な革命家レーニンに楯を突いている。レーニンが「何からはじめるべきか」において語った \wedge 正規の包囲軍 \vee とは、国際革命軍の一部隊としてあったのであり、著者のように大衆暴動主義としての「包囲軍」としてあったのではない。レーニンは、敵として党の最終目標を \wedge 武装蜂起 \vee において譲らなかつたのであり、その形態を国際革命軍の一部隊として規定したのである。「戦旗派」の「蜂起の党」への不徹底さは、「戦争」に対する不徹底として表われている。「われわれの世界革命戦争一内戦が

前進し、日本における二重権力状況に接近するとき、スターリニストは、人民戦線派の中核として、革命に敵対する武装勢力として登場するのであることは、六九年十一月の訪米阻止闘争における蒲田周辺の自警団を彼らが積極的に組織した一事実を見ても明らかであり、それは更にソ連の軍事力と結合する可能性も充分考えらる。われわれの戦略がこれとも対応できるものでなければならぬ。これは革命戦争史の教訓から明確である。「これはマンガであり、あいた口が塞がらない。要するに、諸君が棒とヘルメットで戦っている時、アラブやベトナムではソ連製のミサイルや銃が使用されていたことも忘れてはならない。ソ連に対する悪言・悪戯は、戒められねばならぬ。どうして羽田の自警団とソ連社会主義正規軍とが結合するのか。諸君が書いたのは三文週刊誌ではなく党文献であることを忘れずにほしいものだ。このような内容の底流には、新左翼主義 \parallel 反スタ主義が存在し、ソ連共産党と日本共産党を同一視する誤りがみとめられる。

「ソ連ワルシャワ条約軍も反革命軍である。この解体は最も政治が優先するのであり、スターリン圏諸国内部に革命的左翼の核を創り出すことである。」これは、「赤軍派」同様の国際改良分裂主義の見本である。これは、要するにハンガリーやチェコの小ブル反乱を肯定し、実質上プロ独を否定する立場であり、帝国主義者に多大の助力をする結果となる。ハンガリー・チェコ反乱と

は同質のものではない。一方はブルジョアジーの反乱軍であり、他方はプロレタリアートの革命軍である。「戦士七号」の内容は、第一に米帝美化論と米帝の世界戦略、「世界一國同時革命」であり、第二に言葉の上だけの「世界性」と実体上の民族性である。帝国主義的経済主義者 \parallel 共産主義者同盟関西地方委員会 \parallel は、世界共青 \wedge キム \vee の敵である。以上述べてきたように、「共産同戦旗派」と我が \wedge 赤軍党 \vee の内戦は、必至であり、これを避けて通ることはできない。今や新左翼主義集団に果喰う反社会主義分子 \parallel 言葉上の世界革命と実質上の国際改良分裂主義分子 \parallel に対して血の粛清を実行せずして、革命闘争は一切前進することはない。民族ボルシェヴィキと世界ボルシェヴィキの闘いに一切の妥協は不要である。赤軍兵士よ！前進せよ！

我々 \wedge 赤軍党 \vee は、 \wedge 社会主義軍隊 \vee と \wedge 民族解放戦線 \vee と \wedge 先進国蜂起の党 \vee と結合し、立派に、最後まで \wedge 蜂起 \vee を買徹することを誓うものである。

赤色軍隊万才！
赤色政権万才！
赤色日本共産党 \parallel 赤軍党万才！

「同盟外・内戦宣言」

松本礼二・一乗信路（共産主義者同盟再建準備委員会）の名をもって「共産主義者同盟再建へのアピール」が出された。

このアピールのスローガンは、次のようなものである。「日和見官僚集団」「戦旗派」を解体、同盟を七〇年代の前衛として再建せよ！」そして、内容は何も無い。明らかに「再建派」は「戦旗派」からの一步後退である。「共産主義者同盟は、党派利害の党ではなく、革命の党、階級闘争の党であり続けたのである。」大要御立派なことである。しかしながら、党派利害のない党などありうるのか。革命の党、階級の党は、この党派利害を公然と最高の形態において遂行しなければならぬ。たとえば、「六八年に我が同盟の呼びかけた国際会議は、……国際プロレタリア統一戦線の第一歩であった。しかしながら、『戦旗派』の観念論者は、この世界プロレタリア統一戦線を否定し、世界党建設を無媒介的に提起し、世界プロレタリア統一戦線の形成を後退させてしまった。」と「再建派」が言うとき、これは、彼ら自身の党派利害であり、共産同総体から見れば右よりの利害である。

我々赤軍党は、以下の諸点において「共産主義者同盟再建準備委員会」の招請をきっぱりと拒否し、同盟外内戦路線をはっきり

と堅持することに決定した。

まず第一に、「再建委」は旧態以前たる小ブル世界認識に立脚しているということにおいて、我々は見解を異にしている。すなわち「六〇年代世界階級闘争は、南ベトナム解放闘争の前進とその闘いのインドシナ全域への拡大に象徴される。後進国武装解放闘争の世界的な新段階への突入、先進資本主義国における学園闘争の高揚とベトナム反戦闘争との結合、その労働者階級への波及、米国における黒人問題を頂点とする国内少数民族問題の矛盾の顕在化、反抗の増大、『社会主義諸国』における政治・社会的矛盾への民衆の決起、等々として、全世界的に戦後体制への総体として展開されはじめてきた。」という革命運動を小ブル改良反体制運動主義に低める世界認識に対して、我々は明確な世界革命総路線を主張しなければならない。「再建委」の論述では、「後進国武装闘争」と「反戦闘争―黒人闘争」と「社会主義国における民衆の決起」が、同質の闘争としてイメージアップされている。これは明らかに「共産同」のおはこである。「現代過渡期世界三プロク階級闘争」という泥沼への陥没である。すなわち、「後進国民族武装解放闘争」は、「反戦闘争―黒人闘争」に代表される「先進国階級闘争」のさらなる発展と小ブル性の払拭と革命党の建設を要求し、プロレタリア国際主義のもとに結合の軸を求めているのである。そして、現在のインドシナに見られるような後進

国武装闘争の革命戦争への進展過程は、全世界人民の前に「後進国民族解放戦線」は「社会主義軍隊」との革命的な結合を明らかにしたのである。この過程の徹底した総括は、「社会主義国における政治・社会的矛盾への民衆の決起」によって代表される

「社会主義国」に果喰う小ブル右翼分子の反乱に対する明確な革命的見地を要求していると言わざるをえない。要するに「共産同」三プロク階級闘争は、「労働者国家階級闘争」「先進国階級闘争」「後進国階級闘争」といった平板化され固定化される中において現実の階級闘争の中にくずれ落ちざるをえなかったものであり、

その立場は、今や、「後進国階級闘争」の革命戦争への発展に際し、先進国階級闘争の小ブル性へのさらなる後退と社会主義諸国の小ブル右翼反乱への賛美と社会主義軍隊解体といった反社会主義的立場を取って来たのである。しかし、現実には全世界人民が世界帝国主義打倒へ向けた一切の闘いを統一された世界階級闘争へと発展せしめ、「共産主義者同盟」をして「世界プロレタリアート、世界武装プロレタリアート」という直観を準備せざるをえなかったのである。しかし、この「世界プロレタリアート、世界武装プロレタリアート」が、従来の共産同現代過渡期世界論「小ブル世界観↓民族局地戦略に基づいていた限りに対して、それは観念的、トロツキー、ブハーリン的な世界観への飛躍としてあり、赤軍の小ブル突撃隊への改編や国際革命根拠地の改良主

義的実践↓社会主義の左傾化や、解党主義・無政府主義へと転落していったのである。そして、我々赤軍党は、「現代過渡期世界三プロク階級闘争」や「世界武装プロレタリアート」に対し、現代世界革命戦略を△△世界党△△世界赤軍△△の現実的な世界革命の総路線として△△社会主義軍隊△△と△△先進国プロレタリア軍△△と△△後進国民族解放戦線△△の革命戦争としての結合―世界革命戦線を提起して来たのである。そのような意味において、我々赤軍党は、△△世界党△△世界赤軍△△の実質上の牽引車であり、常に国際赤色革命軍の一部隊である。「再建委」の次のような発言は、明らかにML派や革共同や四トロの局地戦略と同じものであり、七〇年代階級闘争の中に民族社会排外主義として発展していくであろう。「現代世界の革命と反革命の主戦場アジア、そこにおける武装解放闘争との連帯においてのみ、世界階級闘争は現実性を持つ。」帝国主義自身が、解放戦争や革命戦争を潜称してくる時代がやってくるのである。これに対して党が世界革命戦略を持っていないということは困難なことであり、そのような党は帝国主義者に打倒されるばかりではなく帝国主義軍隊に解編されるであろう。党の革命党への飛躍が戦争を媒介するように、党の排外主義への転落もまた戦争によっているのである。

このような「共産同」の現代過渡期世界三プロク階級闘争の民族的・排外主義的泥沼に陥こんだ「再建委」は、その独自のノ

ヴィエト論においても民族排外主義・観念論的ソヴィエトに帰着して行くのである。「七〇年代階級闘争において、前衛党が担わなければならない課題は、プロレタリア階級をして全人民の権力へ向けて高めること、つまり、ソヴィエト的団結を領導する権力主体へ形成させるべく一切の努力を集中することにある。で、あるならば、党の軍団は、そういったソヴィエト的団結を形成するための軍団であり、なおかつ、ソヴィエト軍団を領導し、敵権力をソヴィエト軍団と共に滅滅し、その過程でソヴィエト軍団を自己と同質のものに高め、そのことによって自己がソヴィエト軍団に吸収されていくところの存在でなければならない。そして、そのような党派軍団間の統一戦線はそのようなソヴィエト軍団の形成↓敵権力との戦闘↓ソヴィエト軍団の質を党派軍団の質にまで高めること↓ソヴィエト軍団への党派軍団の解消といった全過程における統一戦線として形成されねばならない。」「再建委」の諸君は、革命家なんぞとハッタリをかまさないで、シナリオライターにでもなったらどうか。要するに「考えすぎ」と「口を滑らしすぎ」という性癖は、時と場合によっては有害にもなる。「再建委」の場合がそれである。「七〇年代階級闘争は、前衛党が担わなければならない。」「プロレタリア階級をして全人民の権力へ向けて高めなければならない。」「ソヴィエト的団結をもって権力闘争に勝利しよう。」おおむね、これ位のことを言って、貫

徹できれば立派というものであるし、「再建委」は「革命党」に成長するであろう。しかし、「権力主体」とか「党の軍団」とか「ソヴィエト軍団」とか「党派軍団間の統一戦線」とか「軍団の質」とか「ソヴィエト軍団への党派軍団の解消」とかいったことは、全く必要ではないし、やはりこの場合「考えすぎ」と「口を滑らしすぎ」の御伽話と言わねばならない。このような独自のソヴィエト論こそ七〇年代階級闘争に帝国主義が提起してくる民族共同体論とアジア解放思想に吸収されていくものであり、ソヴィエトは、あくまで世界革命戦争→主要権力武装蜂起の機関でなければならぬのである。しかしながら、我々赤軍党は明らかに、
△世界ソヴィエト派→世界ボルシェヴィキ派→世界プロレタリア独裁派→世界人民共和国派→革命的レーニン主義派▽としてソヴィエト・コミューン主義者である。

「七〇年代は権力闘争の時代である。我々は昨年来こう主張してきた。我々は権力闘争をただ一回の武装蜂起とは考えない。」この論述は二通りに解釈できる。第一の解釈は、「権力闘争は、……武装蜂起とは考えない。」ということであり、第二には、「権力闘争は、一回(きりの)武装蜂起とは考えない」ということになる。もし「再建委」が「権力闘争は、……武装蜂起とは考えない」と言いたいとしたら、我々は無条件に彼らをバカ者呼ばわりする義務があると思う。また他方、「再建委」が、「権力闘

争は、一回(きりの)武装蜂起とは考えない」と主張しているとするれば、我々は、「多くの蜂起」を諸君に期待してはいない、二回きりの武装蜂起を実行していただきたいと言おう。もし、多数の蜂起に自信がおりなら、「共産同」のような田舎侍の徒党の再建にやっきにならずに、その精力を△△蜂起の党▽▽へ注ぎ込んではいかがなものか。

「再建委」諸君が、必死に利害を通そうとしている「国際プロレタリア統一戦線」国際会議」に対して、我々の△△世界党▽▽世界赤軍▽▽の考えを明らかにしておきたい。すでに明らかにした如く、我々の△△世界党▽▽世界赤軍▽▽とは、△△社会主義軍隊▽▽と△△先進国プロレタリア軍団▽▽と△△後進国民族解放戦線▽▽の革命的結合のもとに、単一世界革命戦線を構築することにかかっている。ここにおいて、「国際プロレタリア統一戦線」の位置するところのものは、△△先進国プロレタリア軍団▽▽の固定化としてあり、従来の先進国左派会議の枠から一步も出るものではない。またよしんば「国際プロレタリア統一戦線」を独自の世界戦線として見積ったところで、「先進国左派」と「後進国世界革命派」と「社会主義国反乱派」との国際的連帯ということになり、従来の新左翼主義の国際版でしかない。このような「国際プロレタリア統一戦線」は、世界帝国主義に利用されるであろうし、決定的な時点において我々の単一世界革命戦線の敵として現われるであ

ろう。そして「共産同赤軍派」の名ばかりの「世界革命戦線」も実質的には「再建委」と同様の新左翼主義であり、彼らと同様の道を歩まざるをえないであろう。

現在の「共産同」の分裂に関して我々の言えることは、自然発生的党▽同盟や党内論争主義▽批判的自由や軍の一人歩き▽統一戦線を断固粉碎し、△△蜂起の党▽△△党▽▽軍▽▽△△世界党▽▽世界赤軍▽▽単一世界革命戦線▽▽△△赤軍党▽▽のもとに結集せよ！
「再建委」諸君→過度のまじめさは有害であり、過去の新左翼運動やその統一戦線に酔いしれてはならない。気の毒ではあるが、我々赤軍党は、同盟内外戦主義をハッキリと宣言し、この党活動路線を堅持する。

「赤軍」から「赤軍党」へ

昨年来、新左翼諸潮流はいわずもがな、「共産主義者同盟」において、「解党主義」と「軍の一人歩き」が目立ってきた。そして、この「解党主義、軍の一人歩き」は、二つの仕方によって促進されている。一つは、「戦旗派」に見られるごとく、「軍の党による丸抱え主義」が、党の日和見主義による軍の反逆と脱退に

よって崩壊してしまふ例であり、もう一つは、「赤軍派」に見られるごとく、党独自の世界革命戦略を確定しえないままに、軍をもつて「共産同」へ、「現代過渡期世界論」へ、新左翼主義国際改良分裂主義集団へ帰還しようとする試みである。前者「戦旗派」に対する批判は、「叛旗派」のお遊びに大半任せておけばよいとして、後者「赤軍派」の「解党主義と軍の一人歩き」―「新左翼主義」への帰還は、赤軍兵士としては許されざる行為である。

このような悪徳行為は、すでに昨年において「共産主義者同盟赤軍派」発行の「赤軍派4」パンフによって準備され、今年になって反・党文献主義に満ち満ちた京都大学出版会と北海道大学出版会に雑誌「序章」八木論文「赤軍派から赤軍党へ」によって完結している。

「赤軍派4」は、「世界党―世界赤軍―世界革命戦線」というイメージとしてのアップと、「現代過渡期世界論」と「現代革命論」というリアリティとしてのダウンの混在状態である。そして、「赤軍派から赤軍党へ」は、共産同小ブル世界観―現代革命論とかに規定された現代過渡期世界論への実際の帰還によってまたもや「世界党―世界赤軍―世界革命戦線」を空転させざるをえず、それは「世界階級闘争が新しい段階に突入せんとする地点」にふさわしい世界革命総路線を確定しえず、旧態以前の「共産同」理論に身をまかせているのである。このような赤軍内日和見主義

は、今にして、軍事訓練敗北の無自覚や自信なき国際根拠地運動やインドシナ革命戦争への驚きや帝国主義者の「体制間戦争」という恫喝への屈服や世界水爆戦争への小ブル的恐怖感として成長している。

「不徹底性に対する、罰」として我々に与えられたのは牢獄である。御苦勞さま。しかし、一度あることは二度ある。二度あることは三度ある。後の論述を見てみるとどうも三度で終りそうもない。苦勞にも懲が生えたと陳腐としか言い様がない。

「六六―六七年の世界階級闘争の昂揚は、ジョンソン声明を契機に四月黒人闘争、反戦闘争、五月仏、六月独、八月チェコ、そして一〇・二―日本と飛火し、ブルジョアジーの反革命との、或いはスターリン主義反革命との正面戦に転化し、この正面戦の中から第二ラウンドへの陣容と戦線の再編―次の段階への過渡期の主導性を争う熾烈な闘いが登場した。それはプロレタリアートにとって、正面対峙へと飛躍する闘いであつたが、その中心問題は、帝国主義国家と国際反革命同盟の結節環であり、支柱たる帝国主義軍隊との闘いに転化したことであり、その瞬間に於ける第一ラウンドの敗北をその世界的持続的対峙―第二ラウンドへどう克服していくかであつた。」「米黒人闘争・都市反乱に史上初めて連邦軍隊が投入され、この軍隊との衝突に到り、反乱闘争も又ベンタゴン・デモとしてその対象を明確に軍隊へと設定したのであつ

た。仏「五月革命」の大学―工場―街頭占拠の叛乱も、西独駐屯の仏軍隊の呼び戻しとこの軍隊によるパリ包囲に到り、これになす術なく、ブルジョアジー・小ブル秩序派の巻き返えしの前に敗退したとはいえ、その歴史的到達点を刻したのであつた。まさにこれに対応して、チェコ人民の闘争もソ連―ワルシャワ条約軍との闘争とその敗北に到つたのである。」「プロレタリアートの側は、ブルジョアジーのこの攻撃に対し、闘う方法を持たなかつた。自然発生的爆発は、鎮圧されるか、引き下がるしかなかったのである。だがそれとともに大きな前進をも開始した。米黒人解放闘争は組織的な武装闘争を開始し、かくて「Bring the war home」という闘いに転化した。ブルジョアジーのこの攻勢、ソ連の東欧体制の反動的揺り戻し―戦後世界革命体制の揺り戻しは、中国のプロ文革を終結させ、キューバの戦略的後退をもたらした。プロレタリアートの世界的進撃は終り、再編と準備が始まつていた。」「これは、完全な小ブルの足掻であり、現代世界革命戦略の未確定を体制への反撥で穴埋めしようとする企てである。いろいろ並べてあるごとくを一旦とめると次のようになる。

ベトナム戦争におけるベトナム人民の戦いを先頭に、米国の黒人闘争・反戦闘争や仏五月革命や西独闘争と、チェコ人民のソ連―ワルシャワ条約軍との闘争、これらがその全内容である。我々赤軍兵士は、**△世界党―世界赤軍**△とつて何が利益であり、最

も近道であるか、ということをもつて考えなければならぬ。明らかに八木同志の論述は、**△世界党―世界赤軍**△の利益に反するものであり、「世界帝国主義」の口車に乗せられているものである。まづ第一に我々は、先進国帝国主義内の各共産党が、すでにほとんど帝国主義の侵蝕に犯されている以上、先進国帝国主義内の先進的プロレタリアートは、第二コミンテルン―世界共産党を展望した労働者党・前衛党を独自の力によってでも創出しなければならぬ。しかしながらこのような党は、国際改良分裂主義による新左翼小ブル集団によつては一切成就せず、**△世界党―世界赤軍**△**△世界革命戦略**△をもつてのみ建設されるのである。

そして多かれ少なかれ、新左翼主義集団が、各国日和見主義・排外主義共産党の補完物であり、また他方この帝国主義的共産党が、民族主義へと吸引されていく以上、帝国主義的共産党と新左翼主義集団は、必然的に国際改良分裂主義として同じ道を歩んでいかざるをえない。それ故先進国帝国主義内プロレタリアートの革命党建設の闘いは、帝国主義的共産党と新左翼主義集団による国際改良分裂主義を粉碎し、**△世界党―世界赤軍**△**△世界革命戦略**△**△世界コミンテルン**△**△ソヴィエト**、人民共和国派―世界プロレタリア独裁派―世界赤色政権派―革命的レーニン主義派△によつてのみ結実するのである。これこそ、先進帝国主義内部において見られる**△△社会主義と帝国主義の分裂**△の実態である。帝

国主義的共産党・白色共産党・修正主義共産党・日和見主義共産党・排外主義的共産党・民族主義的共産党に対する我々の党は、社会主義的共産党・赤色共産党・マルクスレーニン主義共産党・革命的共産党・世界的共産党でなくてはならない。帝国主義的の白色日本共産党は、社会主義的赤色日本共産党に赤軍党によって打倒されねばならない。このように先進帝国主義においては、帝国主義的の白色共産党とその同盟者との内戦を抜きにしては、革命戦争に勝利することはほとんど不可能である。その点において、八木同志の先進帝国主義国での新左翼主義集団の無条件賛美と革命党建設の不明確性は明らかである。

そして第二にベトナム戦争におけるような後進国民族解放戦線の闘いは、インドシナ革命戦争に象徴されるがごとく、諸国解放戦線の連合から社会主義軍隊との結合をもって進行しているのである。このことは、従来のような新左翼集団と民族解放戦線の結合が革命戦争を現実のものとしたのではなく、新左翼主義が気嫌いしていた社会主義軍隊と民族解放戦線との結合が革命戦争を現実のものとしたと示している。すなわち、このような現実の革命戦線の形成の進行の中で、新左翼主義集団も帝国主義的共産党と同様に、社会排外主義・日和見主義へと転落していったという事実を覆い隠してはならない。

そして、第一と第二の要件は、この第三の問題として結実しな

「共産同」との裏取り引きなどでは総括はできない。

我々赤軍党は、**△△世界党**に**△△世界赤軍**をその世界革命戦略に**△△社会主義軍隊**に**△△先進国**プロレタリア軍団に**△△後進国**民族解放戦線の構築によって内実化せしめねばならない。赤軍内、**「世界党**に**「世界赤軍派**」「世界ボルシェヴィキ」**世界コミューン**・ソヴィエト・人民共和国派」「世界赤色政権派」「社会主義的赤色日本共産党派」を**△△赤軍党**に**△△入**党させる任務は緊急である。

我々赤軍党は、ワルシャワ条約機構軍、中国人民解放軍、並びに諸社会主義軍隊の強化を要請し、その国際軍への発展に関する企てを歓迎する。我々赤軍党は、後進国民族解放戦線に対して革命戦争への発展に対する素直な受け入れに地方性・民族性・局地性の軍事上の払拭を押し進め、勝利の展望を国際革命軍としての登場とそれに相応の高度な武装を貫徹しなければならぬ。我々赤軍党は、**△△世界党**に**△△世界赤軍**としての資質を備えつつ、武装蜂起を貫徹し、共産主義世界革命へ向けた世界同時革命を準備しなければならぬ。

このような闘いは、当然にも帝国主義軍隊による弾圧の他に、民族排外主義や民族ボルシェヴィキの軍団との内戦をも予想しなければならぬ。しかし、我々「世界ボルシェヴィキ」全世界多数派に革命的レーニン主義派」の赤旗に赤軍旗は、一切の敵を打

なければならない。すなわち、第一の帝国主義国における帝国主義的の白色共産党に対する革命的プロレタリアートの社会主義的赤色共産党への結集と第二の民族解放戦線の革命戦争への突入は、我々に**△△世界党**に**△△世界赤軍**の現実性を与えてくれている。我々の**△△世界党**に**△△世界赤軍**建設の闘いの中で日和見主義の発生は、第三の問題にしばってみれば、第一にまだ権力を奪取していない、いやそれどころか革命を裏切っている共産党と社会主義赤色政権を堅持し、公認の権威を保持している共産党と同一視し、全てをスターリン主義にまともあげようとする小ブル日和見主義への転落であり、第二にそのもとにワルシャワ条約軍を反革命軍に仕立てたり、中共人民解放軍を汚したり、公認の共産党・労働者党を無条件に批難したりすることによって促進されている。そして、戦争に対する小ブルの無理解によって、まだ兵力も物資も輸送線も準備されていないのに、いやそれどころか先進国蜂起の党も確立しないままに、観念上の革命戦争論が往行するのである。八木同志の「スターリン主義反革命軍、チェコ人民のソ連にワルシャワ条約軍との闘争」といった見解は、**△△世界党**に**△△世界赤軍**の建設者としては、「口の滑らしすぎ」であり、失格である。統帥は、何事にも勇敢であり、沈着であり、正確であり、敏速でなくてはならない。「共産同赤軍派」総体の敗北は、このような政治と軍事の不徹底さ、新左翼主義によるのであり、綱領の確立や

ち破り前進するであろう。

△△赤軍は体制打破のための軍隊ではない。**△△赤軍**は、社会主義体制と共産主義体制のための軍隊である。「ベトナム革命戦争が現代世界を端的に越える問題は、①民族解放、南北統一の要求そのものが、窮乏化法則を世界的に貫徹し、『後進国』の政治・経済の民族的基盤の解体と、その抑圧と収奪の上になつている帝国主義世界の否定と、同時にこれと表裏の関係にある戦後世界反革命体制「ヤルタ」に「ジュネーブ体制」(スペイン革命戦争の敗北)に「スターリン主義」と、中国革命戦争の勝利とその一国的固定化に「中途挫折と米帝のアジア支配の歴史的蓄積としての」否定を体現していること。言いかえれば、民族解放・民族統一が、民族抑圧、民族分裂をもたらした世界革命の挫折と帝国主義の延命の否定・更に帝国主義を土台とし、世界反革命体制によって支えられている。世界の『民族国家』への分裂を止揚する要求を体現していること、従って国境と民族を越えた被抑圧民族の国際革命戦争への発展を内在していること。②人民戦争が、帝国主義「植民地型ウクライド」をトータルに否定、止揚する人民の政治的「社会」的組織化であること。かかるものとして、プロレタリアートの全社会に対する政治的ヘゲモニーが貫徹していること。③このヘゲモニーを実体的に貫かれ(軍の党によるプロレタリアートとしての組織化と社会主義政治教育の徹底)、他方では全人民の新しい

結合形態の組織的環を体现する（軍の組織構造、組織規律、英雄主義、献身性と人民との関係）、暴力、共産主義的規律で組織され、思想的に政治的優位を体现する、帝國主義支配と旧来のウクラードにとってかわる新しい社会を胚胎している暴力であること。以上が党軍解放戦線の陣型として世界に登場し世界プロ独への要求を体现していることである。」ここでの八木同志の誤りは、**「赤軍Vを「体制打破」の軍隊に歪曲し、帝國主義軍隊を打倒する社会主義体制・共産主義体制のための軍隊そのものを手このんだマジックII革共同から「戦旗派」までがやった手口II社会主義の組織化や社会形態にまで歪曲していることである。軍隊とは「敵を打つこと」を至上とし、その攻撃とは「敵を包囲し又は誘い込み、敵を殲滅」することである。暴力とは、理想でも、価値観でも、未来の社会形態でもない。暴力とはプロレタリアートがブルジョアII敵を打倒するための革命的暴力以外の何ものでもない。ここでの八木同志の論述は、**「世界党II世界赤軍Vによって立つ世界革命戦略の喪失による「軍」の形而上学的・観念論的昇格にすぎない。暴力とは、ブルジョアIIを打倒する暴力であり、新しい社会を胚胎している暴力ではない。これは暴力に対するカウツキー主義的解釈であり、革命的サンディカリズムの暴力論に席を譲る羽目に陥ろう。それはすでにスペイン革命におけるスターリン主義の批判とスペイン戦線のサンディカリズ****

ム的・無政府主義的・分散的・局部的・パルチザンの戦線に対する是認としてあり、軍の組織規律の非合理的な昇華としてある。**「世界赤軍Vは、あくまで「世界帝國主義V」という敵を粉碎するためにあり、**「世界革命戦略Vは、**「世界帝國主義反革命戦略Vを上回る内容と勝利の保障をもっていなければならない。敵IIブルジョアIIを打つことVこれが、革命兵士の合言葉である。******

赤軍兵士は、「共産同赤軍派」が、戦略上においては帝國主義者のアジ・プロによる口車に乗せられていることに自覚的でないならばならない。しかし、進むべき道はある。どのような道か。「かくて戦争の問題と国家形態の問題が沖繩問題を通して結合する。ここに『國際主義』と組織された暴力が世界的ヘゲモニーII國民的ヘゲモニーとなる根拠と道がある。ここから次の問題が生まれてくる。一つは、この戦争がどのように今日の世界的環であり諸階級諸勢力の相互関係を形造っているかである。ヤルタIIジュネーヴ体制は、スペイン革命戦争の敗北とスターリン主義IIファシズムの勝利とこの米ソ反革命均衡体制への妥協の歴史的総体として、そして帝國主義の延命の形態I現代帝國主義の世界的体系、存立の条件としてこの両者の総体として把握されねばならない。従って、ベトナム革命戦争は、スペイン革命戦争の敗北と中国革命戦争の勝利と國際的妥協を越えた地点での革命戦争とし

てヤルタIIジュネーヴ体制と根底的に對立する國際革命戦争であり、帝國主義の侵略II反革命戦争も又帝國主義の平準化を通して國際的であり、反革命同盟再編を通して國際化していくものであり、ソ連の反革命、中国の根拠地戦略の限界と動揺、ベトナム、キューバ等の『後進国』國際革命戦争派等の全ての位置と役割はこのヤルタIIジュネーヴ体制の危機と『戦争』を世界革命戦争I世界プロ独に転化する点から把握されねばならない。とすれば、『國際主義と組織された暴力』は世界プロ独に向けて『革命戦争を持ち込む』ことによって組織されねばならない。」これは、「革命戦争の持ち込み」など一見勇ましく写るが、實質は、革共同や共産同や四トロ等々と変わるところのない國際改良分裂主義である。ヤルタIIジュネーヴ条約は、過去の反動諸國家間条件でも、帝國主義諸國家間条約でもない。これは、明らかに帝國主義諸國家と社会主義國家が取り決めた条約であり、社会主義軍隊の休息と次の戦闘への準備を利用することもできるのである。八木同志のごときヤルタIIジュネーヴ体制云々とそれに対する小ブル的反撥は、極度に戒められねばならない。**「社会主義と帝國主義との分裂Vと**「帝國主義の不均等発展Vは現代世界革命の時代におけるマルクス・レーニン主義の原則であり、「ヤルタIIジュネーヴ体制と根底的に對立する國際革命戦争II社会主義と帝國主義の融合」と**「帝國主義の平準化」という主張は、現代******

修正主義の見本である。「ソ連の反革命、中国の根拠地戦略の限界と動揺」。これが、八木同志の根底的思想であり、全てがここから出発している。「ソ連の反革命、中共の限界と動揺」。よく新左翼で持て囃された考え方である。しかし、今やインドシナ革命戦争や中東革命戦争やラテンアメリカ革命戦争の現実の中に、新左翼の限界と動揺と反革命を問題にしなければならぬ現実を見る。そして、我々は、武装の質を高度にエスカレートさせねばならない。たとえば、○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○や○○○○にいたるまでの武器を開発し保有・使用しなければならぬのである。しかるに八木同志は、ヘルメットとグバ棒と火炎ビンとパイプ爆弾と日本刀をもって「革命戦争を持ち込む」というのである。しかも八木同志は、戦争問題と国家形態とかいった学者教授の仕事に仲間入りし、現実の戦争の世界階級戦的性格I**「社会主義と帝國主義の分裂V**「帝國主義の不均等発展V**「帝國主義と民族解放戦線の闘いV**「Iを見て取ろうとはしないのである。「革命戦争の持ち込み」なる言いくさは、改良主義であり、**「世界党II世界赤軍Vの政治の持ち込み（世界帝國主義打倒のための先進國武装蜂起）こそが世界革命戦争の勝利の道を開いてくれるのである。ここでの八木同志のブハートリン主義への転落は決定的である。「日本階級闘争は、アジア革命戦争と大合流を獲得していくと**********

同時に、米階級闘争との結合を勝ち取り、中国・朝鮮に巨大な影響を与えずにはおかない。ヤルタIIシュネーヴ体制の再編の要であることによって、世界階級闘争の要に位置していること、ここに日本の内戦的闘いが世界革命戦争の質を持ち、また要求するのであり、それだけに日本階級闘争は国際的党派闘争と統一戦線と固く結びついているのである。かくて日本の国家形態をめぐる闘いは、同時にプロレタリア独裁の世界的権力形態・政府形態をめぐる闘いに煮つまっていくのだ。六九年秋から七〇年への推移は、このような時代の始まりをつけているのだ。「事実はすべて逆ではないか。インドシナ革命戦争に合流したのは、中国や北朝鮮であり、その発展に啞然としていたのが日本階級闘争、なかでも日和見主義新左翼集団ではなかったのか。「日本とアジア革命の合流」「ヤルタIIシュネーヴ体制打破」「日本の国家形態の変革は、世界の変革だ。」これだけ揃えば右翼行動団体のスローガンである。七〇年代世界帝国主義はバカではない。これほどまでの世界人民の攻撃を受けながらも、国家形態は残存しつつ、支配の牙を研ぎ、新たな攻略に向けて出発しようとしているのである。八木同志のやり方では、帝国主義者は、うまく逆手に取って赤軍を粉碎し、自衛軍に再編してしまおうであろうことが眼に見えている。戦争は急流のごときものであって、左から右から渡ろうとする者を滝壺の中に引き込んでしまう。この急流に勝利するのは、唯一

鯉のごとき地力を持ったものだけである。戦争には戦闘の軍隊が必要であり、「改良」の軍隊は必要ではない。いわゆる日本階級闘争の「特殊な位置」とは、そのような「改良」の軍団が非常に多く、ΛΛ革命Vの軍隊が見当らないということである。にもかかわらず、八木同志は、新左翼の「改良主義」軍団から選りすぐりの精鋭を、「改良主義」の精鋭軍団として組織しようとしているのである。

一 発 八太郎

